2021

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
3月号
No. 693

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
2月号
No. 692

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
1月号
No. 691

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
6月号
No. 696

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
5月号
No. 695

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
4月号
No. 694

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
9月号
No. 699

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
8月号
No. 698

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
7月号
No. 697

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
12月号
No. 702

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
11月号
No. 701

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
10月号
No. 700

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
1月号
No.691

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

南天の姿を

＜2頁の花＞　櫻子

花材　南天（目木科）
　　デンファレ（蘭科）
　　ミリオグラタス
　　（百合科）

花器　陶花器（宇野仁松作）

真っ直ぐに立ち上がる姿の南天。縁起の良い木でお正月の花材として多く出荷されるが、今年は早くから紅葉のきれいなものが多かった。

足元には柔らかくしなやかな白いデンファレをいけた。

ミリオグラタスを添えて、硬くてゴツゴツした南天の枝を見えなくして軽やかに。

お庭に植っている雰囲気とは違う私好みの華奢で軽やかな姿にしてあげるのもいけばなの楽しみのひとつ。

謹賀新年

皆様のご多幸とご健康をお祈り致します。

稽古の立花

〈3頁の花〉　健一郎

花型　除真立花
花材　柊（木犀科）
　　雪柳（薔薇科）
　　水仙（彼岸花科）
　　鳥不止（目木科）
　　椿（椿科）
　　赤芽柳（柳科）
　　寒菊（菊科）
　　小菊（菊科）
花器　陶花器

毎月一回家元の立花研修会が行われている。一杯余分にお花を頼み、私はその日の晩に立てる。毎度、見事な取り合わせで、毎月の楽しみの一つである。立てる前に家元の説明を受けることができないのが残念である。毎回役枝のらしさ、その植物のらしさを意識しており、今は特に奥深い景色が作れたらなと意識している。お風呂上がりの半分目が閉じかかっていようとも、家元の発す一言が次への課題となってゆく。

松をいける

＜表紙の花＞　仙溪

花材　枝若松（松科）
　　水仙（彼岸花科）
　　薔薇（薔薇科）
　　「タージマハル」
花器　陶深鉢（フランス製）

お正月には松をいける。

特に若松のなんと美しいことだろう。力強く、若々しく、清々しい。

いける前にはそれほど強くは感じないが、いけた後では印象が変わる。とても生き生きと輝いて見えるのだ。水を充分に吸い上げ、葉に力をゆきわたらせるからだろう。或いは心地よい空間を得て、伸び伸びと本来の姿を見せてくれているのかも。

ほんとに美しいと思う。心からそう思う。こんな松を育ててくださって有り難うと言いたい。だからこそ、大切に扱って、心を込めていけたいと思う。

このバラも特別に育てられたバラのようだ。たった2本でも松に負けていない。スイセンを加えて、私の大好きなとり合わせにした。

二〇二一年
令和三年
辛丑（かのとうし）

二〇二一年は丑年。干支の「辛丑」にあたる。

「辛」は10段階の8番目で、字の辛は刺青の針を表し、痛みを伴う幕引きや辛い衰えを意味する。

「丑」は12段階の2番目で、字の丑は指に力をこめて曲げた形を表し、命の息吹が充満している状態。

「辛」と「丑」は「土生金」という「相生」の関係にあり、相手の力を生かし強め合う。

「納音」という物差によると今年は昨年と同じ「壁上土」で、地道で堅実、不動の精神。

以上のことからすると、衰退や痛みは大きいが、大きな芽生えを感じる年であり、堅実で強い精神力が求められる。

まさにコロナ禍による試練が続きそうだが、こんな時こそ強い生命力と強い精神で、新たな輝きを生み出そうではありませんか。

新春の清々しさ

＜4頁の花＞　仙溪

花材　青文字（楠科）
　　ミニ薔薇（薔薇科）
　　アイリス（菖蒲科）
花器　青磁花瓶

アオモジの丸い蕾の中には数個の花が春を待っている。割ってみるとレモンのような香りがする。春にはモコモコと賑やかに咲き出すのだが、今はまだ静かな風情である。

アオモジの相手には瑞々しい華やぎが求められる。アイリスのクールさとミニバラの優しさが程良く寄り添う。

蛇の目松

＜5頁の花＞　仙溪

花材　蛇の目松（松科）
　　カーネーション（撫子科）
花器　陶花瓶

このジャノメマツはクロマツの斑入りで、とても珍しい。よく見るジャノメマツはアカマツの斑入りで、葉の元が白（黄色）くて優しい印象の枝だが、クロマツのジャノメマツはとても力強い。単体でも存在感があるので、シンプルにカーネーションを合わせたが、ピンクを加えたので優しい感じになった。赤色だけにしても良かったかな。

花と器

仙溪

中国の青銅器の歴史を簡単に紹介したことから、立花が生まれる前の花と器について調べ始めたが、日本の絵巻に挿花図を探し、中国、インドの遺跡に残された壁画や浮彫に挿花の痕跡をもとめる内に、仏教の供花はいつから瓶に花を立てるようになったのか、などとどんどん興味が膨らんで、なんだか宝探しでもしているみたいだ。

今月号で紹介した中国北方の墓に描かれた瓶花図も大発見である。絵は拙い感じだが、描かれたテーマに心を打たれた。仏のためのものとはいえ、様々な花を育てて大事に大事にいけていたに違いない。

そんな瓶花が仏教の供花に加わったのはいつどこからだったのか。まだまだ宝探しは続く。

赤芽柳（あかめやなぎ）

＜6頁の花＞　仙溪

花型　生花　草型（そう）　留流（とめ）し

花材　赤芽柳（柳科）

花器　煤竹（すすだけ）竹筒

この赤芽柳や前号の行李柳（こうりやなぎ）の生花を美しくいけるにはそれなりの技術が必要となるが、それだけに綺麗に入ると嬉しい。技術は簡単には身につかない。何度もいけることしか近道はない。

臘梅　椿

〈7頁の花〉　仙溪

花型　生花　草型　副流し
花材　臘梅（臘梅科）
　　椿（椿科）
花器　龍耳銅花器

ロウバイ（臘梅・蠟梅・蝋梅）は花を蜜蝋に見立てたり、臘月（旧暦12月）に咲くことから名前があるそうだ。中国原産で、「立花時勢粧」にはまだ記述がない。甘い良い香りがする。

作例ほどの古木はめったにいけられない。撓めが効かないので、役枝の選択が形を決める。良い曲がり方に助けられた。

万年青

十三葉一果

前号に掲載した万年青十三葉一果の図が十一葉一果の図だったので再掲載します。

『ええ格好しい』

健一郎

おじいちゃんは行き先を間違えたタクシー運転手に「面白い話をありがとう。これはそのお礼です。」とチップを渡し、満たされた笑顔で車から降りた。

道のプロフェッショナルであるタクシーの運転手があろう事か、道を間違え1時間ほど道を走らせた上に、おじいちゃんの機嫌を伺うような会話に苛立ちに身を震わせていた自分がどうでもよくなった。何が起こっているか分からず、いっとき頭が真っ白になり、私の関心は祖父への不信感へとすり替わったのである。平然とそういった行動をする祖父を側で見てきたが、いつもいい顔をしていた。祖父は何も言わずにムスッとしている私を見て楽しんでいたに違いない。

自分の事で精一杯な時にこの話をよく思い出す。祖父が持っていた自信、余裕への憧れからだと思う。余裕がなければここまで人のことを思えない。

この話を思い出すたびに何故か、動物が自分の損失を顧みずに、他者の利益を図る行動という、利他的な行動について考えさせられる。祖父が利他的な行動をしていたかは不明なままであるが、私はいつも思考の中心には自分がいたことを自覚していたからだろう。人を自分と同じように接することができている祖父が羨ましかった。祖父は自分に酔っている様にも見えたが、それはそれで気持ちがいいものだ。何故なら2人ともいい気持ちになっているからである。

人間に、みられる利他的な行動は余裕からしか生まれないのではないだろうか。

極端な例になるが、余命宣告を受けた人で、世界経済について本気で心配する人はいないだろう。自分へ差し迫った恐怖があると、視野が一気に狭くなる。自分の事と、自分に近しい人たちの事を考える。人は本当に面白いもので、紛争でどれだけの被害が出ようと、自分の顔にできたニキビの方が重大な問題であるのだ。

自分に余裕が無いと人に考えを及ばせることはできない。ある程度、自分のコンディションを日頃から整えておく必要がある。

直近では、通りすがりのご婦人が落とした携帯を拾うことができなかった。引越しのため、大きな荷物を両手いっぱいに持っていたからだ。心に余裕は持てていたのだが物理的に手が塞がっていてはどうもできない。

その点、グループホームでは役割が与えられていて気持ちがいい。お給料はいただいているが、フリーマンとして利用者さんの困りごとを支援し放題だ。とはいっても利用者さんがしたくて出来ないことを出来ない分だけ補助するだけの事である。生きる事に疲れた人であったとしてもせっかく生きているのだから、今を笑えるものにできたらなと思っている。お節介をしたりして家に帰りたい利用者さんの気持ちが「家庭帰りたいけどここに居るのも悪くないな」程度に思って頂けることを日々、目指している。お礼の言葉も嬉しいが、「ここはええとこ。きてよかった〜。」この言葉ほど嬉しいものはない。

いい状態とはいつも適度に手を抜いて肩に力が入っていない状態のことである。手ぶらで何も考えないでいると、周りの情報がよく入ってくる。自分が街を歩いているのではなく、街を歩いている自分に視点が変わる時でもある。

利他的行動の起源は蟻や、蜂が示してくれている。自分だけの利害を優先するわけではなく、集団として生存するために、機能的な社会を作り、それぞれの環境を取り巻いている。生き物の世界では集団内では、利己的な個体が利他的な個体に勝つが、集団間では、利他的な集団が利己主義者の集団に勝つとされている。そして、自然淘汰は個人のレベルだけではなく、集団レベルでも生じる。集団内のメンバーを犠牲にしながら集団をより幸福にするような集団選択のメカニズムが働いているというのだ。

それはもちろん人も例外ではない。社会性に基づく利他主義こそが人と言う生物種の成功には必須だったに違いない。生物進化の歴史における重大なステップでもある。個人が他のために効果的に分業し、最終的には自分に返ってくるものを期待している。

不機嫌そうな利用者に向かって、とびきりの笑顔を見せると、そこそこの笑顔が返ってくる。利用者さんのとびきりの笑顔が見たくてとびきりの笑顔を作ったはずなのに、利用者さんのそこそこの笑顔で私は本当にとびきりの笑顔になってしまう。そして本当に笑うと利用者さんも本当に笑ってくれる。利用者さんに少しでも不機嫌な状態でいてほしくないな。と思った気持ちが作った笑顔で本当に自分も笑顔になっただけの話である。

余裕なんて全くない時に、無理矢理にでも余裕を作れば、自分も救われるのではないだろうか。

私自身、自己中心的な性格を重々、承知している。第一声が、「僕」または、「俺」であるからだ。だが利他的ともみてとれる行動をすることもある。それは自然にでた私の一面ではあるが、自分のその行いに、いい気分になっているので利他的な行為として認めていない。その場では利他的に見えたとしても、長期で見て自分に返ってくる見返りを見込むこともある。何かされたら何かを返さないといけない気がする。人が生きていることに喜びを感じるようになった最近では、考えるより先に身体が動くようになりつつあることをこの一年ぐらいで感じる。自分が中心ではあるが、自分が助けたいから助けているだけである。少し冷たく感じるがそれぐらいでいいのかもしれない。

行為までの思考過程は違っても結果の行動が同じだったらそれはそれで素敵な話ではないだろうか。ええ格好をするのは気持ちがいいものだ。

京都嵐山花灯路
いけばなプロムナード

会期　12月11日㈮～20日㈰
会場　嵐山一帯
協力　京都いけばな協会
当流出品
前期展　12月11日㈮～15日㈫
桑原仙溪　二尊院門前
花材　飯桐　南天　菊
（写真①）

あえて赤い実を2種使うことで、温かみを感じてもらいたかっ

張世卿墓の壁画
前室4面の壁画（図①～④）

中国「遼」の壁画墓

仙溪

遺跡の壁画を調べていたら、花瓶に花を挿した絵がいっぱい出てきて驚いた。日本の平安末期にあたる西暦一一一六年に造られた、中国宣化地方の豪族の墓である。

中国では唐が滅び、五代十国の時代を経て宋の時代へ。唐時代の国際色豊かな王朝文化から、宋時代の自由な庶民文化へと変わってきた頃である。

その辺りは遼（内モンゴルを中心に中国の北方を支配した国）の統治下にあり、農耕地でありながら遊牧民の影響を色濃く受けた地域だ。そんな土地の漢民族の豪族、張世卿という人の墓である。

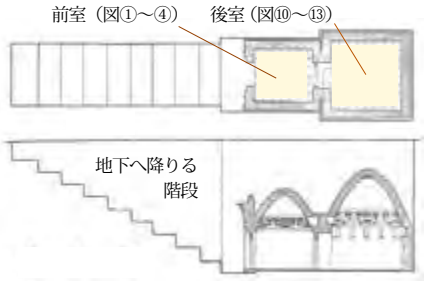
張世卿の墓は地下に穴を掘って造られている。階段を降りて行くとまず前室があり、その奥に棺が置かれる後室がある。すべて煉瓦で造られ、白い漆喰が塗られている。そして色鮮やかな壁画が描かれている。

墓誌によると張家は代々農業に従事し、地主として土地を賃貸しながら果物を栽培し家財を蓄え、天災の年でさえ粟を献上し、民衆に与えたため官位を拝領したとある。

そんな中でも張世卿は自らよく働き、当時の道教に憧れ、儒学を崇め、仏教を敬い、多くの人から慕われる人物であったようだ。

彼は仏への供花のために珍しい花を育て、特別に花瓶まで造らせた。その花の種類は百を超え4万本に至り、五百個の瑠璃瓶（ガラス花瓶）

⑤ 墓の平面図と側面図



出展：①～⑬
https://artouch.com/views/content-280.html

後室4面の壁画（図⑩～⑬）

を作ったと記されている。張世卿という人が供花に対して拘りを持っていたこと、そして当時の供花に瓶花がすでに加わっていたこと、さらに園芸栽培のブームがおこっていたことが推測できる。

後室、天井中央の蓮華模様の周りには星座図と散華が描かれ（図⑥）、梁の下に蓮華台座と蓮の葉にはさまれた長方形の凹みがあり、その間に瓶花が供花として描かれている（図⑦⑧⑩～⑬）。その数18。生前に彼が行った供花の功徳を表したものだろうか。そうすると凹みにはそれぞれ仏像があったのかもしれない。

青い花瓶にハスの花と葉が見える（図⑦）。他の木や花は何だろう。

描かれている情景が興味深い。朝、扉の外から侍従が入ってきて読経の用意を始める（図⑩）。机には経箱と経典、茶、香が用意され、そして今まさに瓶花を供えようとする男性の姿が（図⑨⑩）。さらにお茶を準備する場面（図⑫）、夜にお酒を用意する場面が続く（図⑬）。

なんて和やかな雰囲気なのだろう。こんなお墓があったとは。

九百年前、熱心に花をいけて精進を重ねた張世卿という人がいたことを、壁画は私達に教えてくれている。

参考：学習院学術成果リポジトリ
論文「宣化地方遼時代張世卿壁画墓に描かれた器物」李含

桑原専慶流いけばなテキスト691号　2021年1月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com

いけばな作品写真：宇佐美宏

紅葉一色

健一郎

花型　砂物　紅葉一色
花材　いろは紅葉（楓科・無患子科）
　　松（松科）
　　晒木
花器　銅砂鉢

砂物についてはまだ全く分かっていない。ただ枝の赴くがままに立てていっただけである。写真では伝わらないが大きな松の枯れ木の控枝を気に入っている。大きな枠組みとして、真・行・草とあるが、真から順番にバランスを取ることが困難になっていく。役枝を際立たせるのではなく、紅葉の葉を多くのこした。次の日には葉がカリカリしていたため、今年はただ自然の紅葉が散った時とは違い、自分の一部が散っていくような複雑な気分になった。数年後にこの作品を見てどう自分が思うかは分からないが、今は満足している。綺麗だ。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
2月号
No.692

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

水仙一色砂物

<2頁の花>　健一郎

花型　二株　砂の物
花材　水仙（彼岸花科）
　　寒菊（菊科）
　　小菊（菊科）
　　著莪（菖蒲科）
花器　染付青磁砂鉢

去年から自然のままに育った水仙を仕入れてもらっている。手間のかかる作業だが、僕のわがままに花屋さんと農家さんの協力があって、勢いのある水仙を生けることができている。今回は前回に比べ、黄色い葉の比率が多かったので、水仙の終わりの季節を思わせる砂物になった。大好きな緑の綺麗な格好良い形をした葉が一枚一枚が際立ち、花がより引き立っており、寒菊も綺麗な花を咲かし、良い景色を見せてくれている。

器は鴨が泳いでいるのであろうか。その情景と色が水仙によく似合う。

水仙の枯花

斜め横から

春の除真立花

〈3頁の花〉　仙溪

花型　除真立花
花材　山茱萸（水木科）
　　木瓜（薔薇科）
　　猫柳（柳科）
　　辛夷（木蓮科）
　　松（松科）
　　椿（椿科）
　　菊（菊科）
　　小菊（菊科）
　　葉蘭（百合科）
花器　銅立花瓶

4種類の花木に、松、菊、小菊を加えて春の立花の参考に立てた。

細い枝ばかりの場合、晒木か苔木を添えると景色に厚みがでる。それらがなくても、葉蘭や枇杷の葉があれば役枝の出口をしっかりした感じにできる。

前からは見えないが、人で言えば腰のあたりにも松と椿を出している。

躍動する生命力と、静かな水際が立花の醍醐味だと思う。奥が深い。

寒紅梅

〈4頁の花〉　仙溪

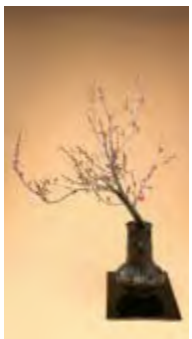
花型　生花　草型　副流し
花材　紅梅（薔薇科）
花器　饕餮文銅花器

1月中頃、健一郎夫婦が京都御所の梅林に写真を撮りに行っていた。すでに満開の梅もあったそうだ。おそらく去年の暮れから咲き始めたのだろう。

寒中に咲く梅を寒梅と呼んでいる。寒中とは小寒から節分までのことを言い、寒の内とも言う。今年は1月5日から2月2日までの間が寒の内だ。

梅は寒さの中で咲くことが好きなのに違いない。そうすることが良い実を結ぶことを分かっているのだろう。寒さを楽しんでいるようにも見える。草木の中の君子と称えられるのも納得である。

健一郎撮影



瓔珞の花

〈5頁の花〉　仙溪

花材　土佐水木（満作科）
　　牡丹（牡丹科）
花器　龍耳瑠璃色釉陶花瓶

トサミズキの花は瓔珞のようだ。昨年の7月号で紹介した観音菩薩の壁画(写真㊧)で天蓋からぶら下がったり、菩薩が身につけている煌びやかな飾りが瓔珞だ。インド貴族の装身具が仏教に取り入れられたものらしい。

そんなトサミズキの花に高貴な花と器を合わせた。鉢から切りたてのボタンを一輪。中国の花器にいけると、不思議な美しさを見せてくれた。

トサミズキの葉（4月頃）

出展：http://www.zoezoe.biz/2010_syokubutu/ka_6_ma/199_mansaku/corylopsis/tosa_mizuki.html

花のちから

仙溪

「はるかのひまわり」が大輪の花を咲かせて、インドネシアの人々を勇気づけていると、ＮＨＫＢＳ放送「国際報道２０２１」で紹介されていた。

３年前の９月にインドネシア、スラウェシ島を襲った地震と津波は、死者・行方不明者約５千人という大きな被害をもたらした。現在も避難生活を送る人たちが、ヒマワリの花に心を癒やされている。

「家族や友人を亡くして心が押し潰されそうになった時、ヒマワリから力をもらった」と現地の人。

「はるかのひまわり」の種を日本から届けたのは兵庫県の阪本勇さん。仕事で10年前からスラウェシ島を頻繁に訪れていたことから、現地の人たちを励ましたかったそうだ。

「はるかのひまわり」は26年前の阪神淡路大震災で、小学６年生で亡くなったはるかちゃんの家があったところに咲き出たヒマワリだ。「はるかちゃんがヒマワリになって帰ってきた」。

それからそのヒマワリの種は多くの人の善意によって様々な場所に届けられ、多くの人を励まし続けている。無心に大輪の花を咲かせるヒマワリが、人に代わって温もりを届けてくれている。押し潰されそうな人を勇気づけている。

伸びる空間

〈6頁の花〉　仙溪

花材　小手毬（薔薇科）
　　薔薇（薔薇科）
　　チューリップ（百合科）
花器　陶花瓶

チューリップは上に伸びる空間をあけておきたい。コデマリとバラは意識して前方へ出している。

集めて強める

〈7頁の花〉　仙溪

花材　河柳（柳科）
　　喇叭水仙（彼岸花科）
　　トルコ桔梗（竜胆科）
花器　陶水盤（伊藤典哲作）

どんな雰囲気にしたいかを決めて、同じ種類の花材を分散させるか集めるかを考えればいい。

『聴覚』

健一郎

私が最初に記憶している音は、幼稚園児だった頃に祖母が子守唄にかけてくれていた『トルコ行進曲』だ。寝る前に昔話の後にCDをかけてくれた。楽器はフルートのみで心地がいい。行進曲であったが自然と眠りにつけるようになった。音楽を聞くことは好きであったが、演奏する方は得意でなかった。歌うときは音程がとれず、楽器を触っても思うように指が動かない。母親は私にピアノを習わせようとしたが、踊ってばかりで、仕方なしにサッカーをやらさせたようだ。

あの頃より二十程歳を重ねた。色々な音を聞いているはずなのだが、記憶に鮮明に残っている音は音楽が多い。私は言葉の発明が大きく聴覚を退化させたと考えている。音が意味になるということは音である要素が少なくなるからだ。空耳は自分の耳が捉えることのできる言葉であるのもその例だろう。音楽もそれぞれの地域でそれらしい音階（意味）を与えているものである。

いくつかのジャンルの音楽を聞いた。回数は音楽プレイヤーで聞くことが多かったが、やはり心揺さぶられる音楽体験は、生のものであった。

少年時代は祖父がずっと聞いていたジャズ。祖父といる事が多かったので、自然と影響を受けた。上海に行った際、祖父とタバコ屋さんで大好きなキューバの葉巻を選んでバーの席につき、僕がリクエストした曲を演奏してくれたことが記憶に残っている。どんな曲だったかも思い出せず映像だけの記憶だが、初めての生の音楽体験だった。当時小学生の私にとって全てが新鮮だった。学校から行かせてもらった、京都市交響楽団の演奏の迫力を今でもよく覚えている。パイプオルガンという楽器もその時初めて知った。

小学高学年から中学生の頃は日本、イギリス、アメリカのポップ音楽を聞いていた。日本の歌手は親に頼み、コンサートに連れて行ってもらったが、感心したのは舞台装飾や衣装で、音は、音楽プレイヤーでの体験とさほどに変わらなかった。

高校時代は日本のロック音楽に傾倒していた。耳で聴くのではなく、体で聞く体験をした。ロックフェス、音楽ライブでは頭、体を揺らしバスドラムで心臓を揺らされ、人の上で転がり回っていた。生の音の体験として面白いものだった。この頃はCDで聞くと音が弱く感じるようになり、ライブに行くことが増えた。そして、この時から音について不思議な気持ちを抱くようになった。

人間の耳には聞こえていない2万ヘルツ以上の高周波（音の高さ）は体と心の健康をつかさどっている脳を活性化し快適感をもたらすことができるらしい。YouTubeやCDは人間の音に聞こえない音を録音していない。生の音楽は低周波、高周波、関係なく私の全皮膚を振動させ、聞くことができるから特別なのかもしれない。そして、音は聞こえたその瞬間から消えて無くなっていく。花の命よりずっと儚い。この音の儚さにオーラがある。録音した鳥の鳴き声、水の音を家で聞いてもそれはただの複製物でしかない。

ロックと並行して、ヴァイオリンの音がすごく好きで、聞きに行っていた。そして、大学時代には小澤征爾の演奏を体感した。音の振動が自分に伝わり、理屈なしで心を動かされた。音で感情が込み上げ、胸が苦しくなった初めての経験である。なぜ圧倒されたのか考えているうちに音楽とは何か、音とは何かと考えるようになり、現代音楽に関心を持つ。ジョンケージ・武満徹や音に挑戦し続ける坂本龍一に興味を持った。

グループホームで働くようになってからは、日本の季節を題材にした童謡に強い共感を受けた。日本の自然が作らせたと思えるほどの歌詞と綺麗なメロディーの流れは聞くほどに感激する。幼い頃に聞いていたはずなのに身体へ染み込むようにして聴こえる。今までボーカルの声を言葉としてではなく一つの楽器にも近い、音として認識していたのだが、童謡の美しい詩が味わい深い。

祖母から子守唄にクラシック音楽を刷り込まれ、祖父といる安心感の側でジャズを聞き、ポップ音楽を耳で聞き、ロック音楽を体で聴き、現代音楽を耳と頭で聴いた後はグループホームで童謡に浸った。そして今は、体を自然に溶かし、自分自身もノイズとなり、音として在ることが気に入っている。その時々で自分にとって、いいものを聞いて過ごしていたい。最近は音楽より、御所や鴨川で寝転がっている方が好きな音に出会える。

よく意識して音を聞くことがある。目を瞑（つむ）り、静止する。自らは、音を立てず耳をたてる。初めは自身の呼吸に意識がゆくが、次第に自然と、周囲へと注意が向く。自分を少しづつ無くしてゆき、その場に自分を溶かす。自分に当たる風の音を聞くと自分が今ここにいた事を思い出す。風が吹き葉が揺れる。そこに葉がある事に気づき、目には見えないが風の存在を確める。目に見えないが耳には音として聞こえる。

今ここに注意を向けて耳をたてると、さまざまな音が聞こえる。聞こえていたはずだったが聞いていなかったのだ。私たちは常に音という情報に晒されている。過去や未来の自分について考えることがよくあるが、最も大切な今の自分は耳を研ぎ澄ますことで強く認識できる。

この半年ぐらいは突発性の難聴と付き合いながら生活している。飛行機の離着陸の際に耳が詰まったように感じるときの耳閉感が、疲れが溜まると現れる。酷い時は痛みを伴う。落ち着きがない性格が体に無理をさせてしまっていた。今は何もしない時間を大切にしている。音楽を聴くと、普段に比べ、1オクターブ低い音に聞こえ、疲れの度合いに比例して音が反響して聞こえる。菜月はその事を知ってエコーがかかったような声を振動させて話しかけてくるのでまいる。音楽も長い間楽しめていない。無くして初めて大切さに気がつくと言うが、その通りである。

聴覚の大きな特徴として亡くなる直前まで音が聞こえると言うことを、介護職として人を看取るときに初めて知った。意識レベルが低下して声が出ない状態であったが聞こえていると信じて声かけをしていた。相手が聞こえていると信じて話す声は独り言とは性質が異なるが、自分の声がよく聞こえた。話すことで普段言わないようなことでも、胸の奥底で燻っていたような言葉が出てくる。日々の言葉を見つめ直す必要を考えた。

ついこの前にグループホームで1人の利用者を看取ることができた。理想的な老衰で、無くなるまで日々接することができ感謝している。僕が働き始めた初日からお世話になっていた利用者で人として大切なことを学んだ。会話が少しづつ難しく

なった頃から個室で2人きりでたくさんのお話をした。

看取るその瞬間はなんとかご家族に来てもらうことができ、逝かれた。本当によかった。在る力。存在力とでも言おうか、そんな言葉が頭をよぎった。人がそこにいる事は大きなことだ。次の日、その部屋から一切の音がなくなり、匂いだけが残っていた。

音は同等ではなく、全て自分で選んでいる。意識すれば鳥の声、虫の声を聞き取ることができるが、注意を向けることが難しい。意識して選ぶこともできるが、ずっと意識を聴覚に向けることは難しい。

日々を自分の聞きたい音が聞こえるように癖をつけるといつも心地よく過ごせるに違いない。周りの環境を変えることは難しいが日々の言う言葉を改めるだけでいい。

声が出なくなるまでは、自分が一番聞いている言葉は、自分が話す言葉である。誰に何を話そうが、誰よりもその言葉を近くで聞いているのは自分だ。そう考えると少しは自分と同じように人に対しても接することができるのではないだろうか。人を大切にしていることはその実、自分を労る事になる。

早春の色合い

＜表紙の花＞　櫻子

花材　白梅（薔薇科）
　　菜の花（油菜科）
　　スイートピー（豆科）
　　晩白柚（蜜柑科）
花器　手付舟形陶水盤

今年の冬は暖冬なのか厳冬なのか、週代わりで気温が変化し温度調節が難しい年となった。

昨年末に訪れた植物園には楓の大木が紅葉していて見事だった。周りの道には色づいた落ち葉が敷き詰められて大地を温めているようで、スノードロップやナルキッサスの花が控えめに咲いていた。

今年も干支の置物と一緒に晩白柚を新年の花として飾らせていただいた。その後も食べてしまうのがもったいなくて、早春のいけばなの彩りとして一緒に置き合わせた。

白梅と菜の花とスイートピー。大地から淡黄色が萌え出る。穏やかで平和な春がきますように。

オンライン講座修了のタイミングでレモン登場！

いつのまにか、、、　僕も撮って〜！

ジャパンスピリッツ in 京都

12月29日〜1月5日　京都駅ビル
出品：桑原仙溪
花材：松2種　水仙　バラ2種
花器：陶水盤（ザールバーグ作）

上座部仏教＝南伝仏教、テーラヴァーダ（長老の教え）仏教。釈迦の戒律を厳格に守る保守的な仏教。スリランカ、ミャンマー、タイ、カンボジア、ラオスに伝わる。

スリランカのガードストーン

仙溪

古代インド人は宇宙の生成や豊穣多産を、壺から蓮が生え出る図像に託していた（写真①）。その命の源としての壺のイメージは、その後どのように展開してゆくことになったのか。

インドの南東にある緑豊かな島国、スリランカには紀元前3世紀に仏教が伝えられ、現在も人口の約7割が仏教徒である（上座部仏教）。

スリランカ北部の都市アヌラダプラにあるアバヤギリ大塔（写真②）は、紀元前1世紀建立の仏塔で、5世紀初めには5千人の僧がいたことが中国仏教僧法顕の『仏国記』に無畏山寺の名で記されている。当時は大乗仏教の研究もする仏教世界の中心的研究機関であった。

仏塔（ストゥーパ）に至る道の両側には、石で造られた壺が置かれ（写真③④）、壺から様々な動植物が生まれ出る石の浮彫が参拝者を出迎える（写真⑤）。

「壺」は水の象徴であり、水は生命の源と考えると、生命世界の母胎をイメージして造られた仏塔の入口に相応しい。

古代スリランカの仏教寺院遺跡には特有の装飾として、ムーンストーン（サンダカダパハナ）とガードストーン（ムラガラ）がある（写真⑥⑦⑧）。寺院に入るにはこの半円形のムーンストーンの上を裸足で通ることになる。神聖な領域に入るための禊ぎの役目があるのだろう。そのムーンストーンの両側にあるのがガードストーンだ。

全身を宝飾で着飾った男性が片手に発芽する枝を持ち、もう一方の手には壺を乗せている。この像は蛇神王ナーガラージャで、頭の後ろに頭が7つあるコブラが見える。（写真⑧）

蛇神ナーガは地底世界を統治し水や雨とも関係が深い。仏教でも釈迦が瞑想している間、ムチャリンダというナーガラージャが嵐から釈迦を守ったという。

そんなナーガラージャが水を象徴する壺を持ち生命を活気づかせ、豊穣と繁栄を約束しつつ聖域を守護してくれている、そんなイメージが湧いてくる。

この生命が生まれ出る壺はプルナガタ、又はプルナカラサと呼ばれ「満瓶」と訳されているが、プルナ（満たされた、豊穣、無限）のガタ（もしくはカラサ＝壺）なので「豊穣の壺」「繁栄の壺」と呼んでもいいだろう。スリランカではプンカラサと呼ばれ、現在も幸運と豊かさのシンボルとされている。

古代インドで生まれた「満瓶」のイメージは、微妙に変化しつつそれぞれの仏教国に引き継がれて行った。

壺がもつ生命世界の母胎としての観念を、一華道家として見直してみたい。

①

プルナガタ（満瓶）のレリーフ。南インドアマラバティ仏教遺跡。紀元前2世紀頃。

出展：https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_gallery_parent/page:3?id=491&siteid=160&minrange=0&maxrange=0&count=24

②

アヌラダプラのアバヤギリ・ダーガバ（大塔）。紀元前1世紀。この高さ75mの大塔は、かつて高さ110mのドームで覆われていたそうだ。

③

④

⑤

参道には石の壺や壺から動植物が生まれ出るレリーフが見られる。

出展：②〜⑤ https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g304132-d3600154-Reviews-or15-Abhayagiri_Dagaba-Anuradhapura_North_Central_Province.html#photos;aggregationId=101&albumid=101&filter=7

⑦

⑥

スリランカ北中部の古都、ポロンナルワの仏教遺跡群の 1 つで「ワタダーゲ」と呼ばれる仏塔跡。元々はドーム状の屋根に覆われており、中央の仏塔を 4 体の座像仏が囲む。四方に門があり、それぞれの階段下に半円形のムーンストーン（サンダカダパハナ）と一対のガードストーン（ムラガラ）が置かれている。12 世紀頃の造立とされる。密林に埋もれていたのを 19 世紀に発見された。
半円形のムーンストーンには蓮華の周りに唐草、馬、象、鳥などが彫られている。スリランカ北部は南インドから何度も侵略を受けた歴史があり、古い時代にはあった牛がこのムーンストーンにいないのは、侵略者がヒンズー教徒だったためと推測されている。

出展：⑥⑧ https://en.wikipedia.org/wiki/Muragala　⑦ https://lonewolf17.com/polonnaruwa-quadrangle-vatadage

⑨

蓮が生え出る壺（プルナガタ）のみが彫られたガードストーンも見つかっている。

⑩

バーマナと呼ばれる像。建物を支える姿をよく目にする。様々な解釈があるが、その 1 つに財宝の神クベーラの手下であるヤクシャ（夜叉）の 1 人で、もとは鬼神だが富を守る役目を持つとされる。
一方、古代よりインドにおいて、ヤクシャは聖樹に住む精霊で、人々に畏れられる存在である反面、無尽蔵の生命力を有する豊穣多産をつかさどる神でもあり、安全・安泰・繁栄の守護神と考えられている。

出展：⑨⑩ https://thuppahis.com/2017/12/08/the-guard-stones-of-ancient-sri-lanka/

⑧

ワタダーゲのガードストーン。聖域の守護神と推測される。コブラフードをつけたナーガラージャ（蛇神王）が片手に萌芽する枝を握り、片手に繁栄の壺を持つ。壺からは蓮の花と葉が生え出ている。足元の小人も守護神としてのヤクシャと思われる。

桑原専慶流いけばなテキスト692号　2021年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

トルコ染付けの器

<12頁の花>

櫻子

花材　青文字（楠科）
　　小手毬（薔薇科）
　　チューリップ（百合科）
花器　トルコ花文陶花瓶

トルコへ旅をした思い出に手に入れた花器。海外で大きな花器は中々見つからないし、もし見つけてもどうやって持ち帰ろうかと悩んだ末買うものは少ない。

イスタンブールのグランドバザールには伝統菓子などをはじめ、民族衣装、スカーフや絨毯、宝石、タイルなどありとあらゆる物が売られている。5000もの店が軒を連ねている中に一軒だけある染付けの陶器店でチューリップ柄の花器を買った。

そんな思い出の花器なのだが、花柄の器に花をいけるのは中々難しい。器の絵柄も引き立てながら負けない様に。青文字も小手毬もチューリップも満開のタイミングで。

横から見た奥行

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
3 月号
No. 693

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

早春のアマリリス

〈2頁の花〉　櫻子

花材　連翹（木犀科）
　　アマリリス（彼岸花科）
花器　ガラス水盤
　　（ウルリカ・ヴァリーン作）

国産のアマリリスは1月末から2月中旬頃に出荷される。花茎に芯棒を入れてあげないと凍てついて折れ曲がる事もある。

今年は寒い日もあったが、しっかりと支えられて花が力強く咲き出してくれた。外国産の花色に比べると色は薄いが、葉を沢山添えると鮮やかな赤橙色を感じる事ができる。レンギョウの鮮黄色もアマリリスの花色を引き立ててくれる。

コスタボダの金彩画の器に元気いっぱい咲いて。

横から見た奥行

桃と菊

〈3頁の花〉　仙溪

花材　桃（薔薇科）
　　菊2種（菊科）
花器　陶水盤

切り花の桃は「矢口」という品種が多い。加温して早く咲かせるには経験と勘が必要だそうだ。蕾の色が濃くて元気そうな枝を買い求めたい。

溌剌とした花色の桃が手に入ったので、大きめの水盤に菊と盛花にした。咲く季節は違うが、ともに中国から渡ってきた花同士。しっくりと合っている。菊と桃には同質の秘めた強さを感じるからだろうか。春と秋の花を合わせるのに抵抗はあるが、分かった上であえて出逢いを楽しんでいる。

春に咲く菊の仲間だと、キンセンカ、シュンギク、マーガレット、ミヤコワスレ、ハルジオン、ヤグルマギク等々。でも桃と合わすにはみんな弱々しい。そうだ、大きく伸びた蕗の薹となら一度いけてみたい。

八重咲きチューリップ

＜4頁の花＞　櫻子

花材　猫柳（柳科）
　　チューリップ（百合科）
花器　ガラス鉢

八重咲きのチューリップ、モンテオレンジとイエローマルガリータ。暖かくなると芍薬（しゃくやく）の様に豪華に咲く。

八重咲きの魅力は花の形も葉も丸みがあって可愛いらしく、いけるとミカンやレモンが並んだよう。

そういえば、店先に売られているキンカンを丁度見つけて食べたくなり、久しぶりに甘煮を炊いてみた。半割にしたキンカンの面はチューリップの笑顔のよう。

フワフワに膨らんできたネコヤナギの花芽も一緒に大きく膨らんできた。

毎日伸びるチューリップと競い合うように。

インドのイメージ

＜5頁の花＞　仙溪

花材　ドラセナ・コルディリネ
（竜舌蘭科）
シンビジウム（蘭科）
花器　トルコ手付銅鍋
ドクラの牛（真鍮製）

以前、インドで買った真鍮の牛。蝋型鋳造でつくられた鋳物で、5千年の歴史があるそうだ。「ドクラ」と呼ばれる職人が村々を回りながら使わなくなった金属製品を溶かしては神像などに作り直していた。

蜜蝋でつくった原型を粘土で包み、焼いて蝋を溶かし出すと鋳型ができる。蜜蝋には仏教三聖樹のひとつサラノキの樹脂も使われると聞いた。細く伸ばした蜜蝋で原型の表面を美しく装飾しておくと、細かな部分まで金属が流れ込んで針金細工のようになる。金属は型に全て流れ込むのでずしりと重い。

コルディリネはオーストラリア原産だが、インド的な雰囲気がある。シンビジウムにもインドの種が入っている。古い銅鍋にそれらを盛って、ドクラの牛を飾った。赤い敷物はインドの大地。見ていると活力が湧いてくる。

人と花

仙溪

「人が花と在るあたたかさが身に染みる」

昨年12月号で菊の立花に添えられた健一郎の言葉なのだが、原稿を読んだ時に思わず唸らされた。確かにそう思う。いけばなの価値はそこにこそあるとさえ思う。

先日、植物園でしゃがみこんで写真を撮っている人を見かけたので行ってみると、か弱い小さな花が咲いていた。「セツブンソウ」の札が近くにあり、解説もつけられていた。

自然の輝きを見つけた喜びと言えばいいだろうか。少し大袈裟に言うなら生命の神秘に見とれてしまう。

セツブンソウ
植物園にて

そんな感動を植物園で味わえるのは、植物園の皆さんのお陰である。花を見て、人を感じ、再び感動する。

そんなことを考えていて気づいたことがある。いけばなも同じなのだと。

部屋に花がいけてあると豊かな気持ちになる。花と器が生き生きとしてそこに在り、まわりの空間を活気づかせる。いけた人の花への愛情を感じると更に感動が深まる。

そんないけばなでありたいと思う。

エピデンドラム

＜6頁の花＞　仙溪

花材　ユーカリ（フトモモ科）
　　エピデンドラム（蘭科）
花器　陶コンポート

エピデンドラムは中南米原産の蘭で、野生種は茎が数メートルになるらしい。春らしい色を選び、ユーカリを合わせた。

彼岸桜の生花

＜8頁の花＞　仙溪

花型　生花　草型　留流し
花材　彼岸桜（薔薇科）
花器　煤竹竹筒

彼岸桜に似る新しい品種らしい。花がうまく咲かなかったが、まだ出荷の試行錯誤中なのかな。桜をいけて楽しんでもらおうと、様々にご苦労されているのだと思う。

『触覚』

健一郎

人間は奇妙である。裸では健康でいられない珍しい生き物なのだ。時々服を着させられている犬を見ることがあるが、毛が無くなってしまうのではと心配している。私たちは猿人から人間へと進化する過程で、びっしりと体を覆っていた毛を失った。それ以降、剥き出しになった皮膚が世界との接点になっている。

皮膚は人体を覆う最大の臓器であり、外界から身を守る役割になってしまった。そして皮膚の状態についてさまざまな方法で情報発信をする器官でもある。毛が無くなってから、より触覚が発達したのではないだろうか。

猿は食べ物をわけてくれた相手に対して毛繕いをする。何かをやってくれたことへのお返し、感謝の心を伝え、信頼関係を築く方法のひとつであると考えられている。家では猫のレモンを撫でると、よく指を舐め返してくれる。愛情深いレモンは丹念に皮膚を舐めてくれる。ザラザラとした舌が僕の皮膚と接触するのだが、産毛しか生えないので申し訳なく思っている。そして用がなくとも体の一部を擦り寄せてくる事がある。そして互いに安心する。猿は怒ったりけんかをしたりしても、触れ合うことで気持ちを落ち着かせるのは、共同体が崩壊するのを防ぐための知恵だという。安心を得るには触れ合うことが、一番効果的なようだ。

幼い頃、お気に入りの布団があった。その布団だとすぐに寝付くことができた。足の親指と人差し指で布団を摩っていると安心して寝ることができた。季節の変わり目に母親が布団を交換して仕舞い込んでは出すようお願いしていたのを覚えている。触覚がヒトに与える安らぎに大きな役割を果たしているのかもしれない。安心感を得られるタッチの力には、目を見張るものがあるのではないだろうか。

グループホームでは言語によるコミュニケーションより遥かに効果的な手段として触れることを意識している。足の裏をくすぐったり、雪が降った日には雪を投げ合う。顔に雪をつけたまま僕の背後を取るおばあちゃんは背中に雪を入れてくる。103歳のおじいちゃんとの腕相撲は僕の50連勝中だ。椅子に座ると、「お兄ちゃん、いつも頑張ってんな」と肩を揉んでもらい、ソファーではクッションでじゃれ合う。毎日が本当に楽しい。もちろん一緒に料理をすると火傷のリスクや、手を切るかもしれない。だが、利用者さん一人一人と向き合っていると生き生きした笑顔が見たくてつい、ちょっかいをかけたくなる。座ってテレビを見ているだけで終わる1日は安全だが、余りにも刺激が弱いと考えているので、喜怒哀楽と何かに触れる時間を大切にケアをしている。

私の触覚経験で一番鮮明な記憶は、もみじの枝を折った事だろう。小学生の頃、公園によく出入りしていた。サッカーボールを蹴りにいく日や友達とカードゲームをする日。そんな日常の中で枝にぶら下がったり、木登りをしたり、寝転んでは太陽を浴びた。次第にスポーツに打ち込み、公園にも通わなくなる。たしか、中学3年生の頃だった。自転車での帰り道、公園の前を通りがかった際、ふと見えた青楓があまりにも綺麗だったので引き返した。強く美しい青楓との再会の懐かしさで、喜びのあまり大枝に飛びつきぶら下がった。すると、その大枝はパッキッと大きな音をたてあっさりと折れてしまった。その場に立ち込めたもみじの良い香りと、手に残った嫌な感覚が忘れられない。初めて植物の命と向き合うことができた瞬間でもあった。

触覚に安心感を与える力があるとするのならば、不快感を得ることも可能である。知らない人と街でカバンをぶつけられた時、もしくは接触がない場合にも皮膚が反応することがある。知らない人に会ったときや知らない場所に行ったときなど、何かの危険を感じるとゾクっとする。子供の頃、ウール素材のタートルネックのセーターをよく着させられていたが、チクチクが堪らなく不快だった。そのセーターを見ただけで、チクチクするような気がしてゾワっとした。今より触覚が優れていたのだろう。残念なことに、今ではなんとも思わなくなってしまった。外世界と身体的に接触している皮膚の感覚が鈍くなることは、世界を感じ取る力が減った事だと考えている。

最近、携帯電話を落としたら画面が割れた。指の腹で触っても割れたとは感じないが、目で見ると割れている。不思議に思い、爪で割れた箇所を触ってみると、僅かなヒビ割れを認知することができた。爪を切っても痛くはないので、神経は通っていない。不思議だ。

私はこれを皮膚の延長線上である爪は触覚が拡張されたものであると考えた。例えばテニスのラケットを持っていれば、ラケットを振って届く範囲まで身体感覚が拡張され、体の一部になる。義足の装着は訓練さえすれば、歩行することも可能となる。

光や音の波形を分析することで再現可能な視覚や聴覚と違い、触覚は最も正確に人に伝え難い複雑な五感である。なのでメガネや補聴器とは違い、義手義足を使いこなす事は努力なしには難しい。触感たらしめている要因が多すぎる。圧力、振動、質量、温度…まだまだあるだろう。そして触れ方によっても触れる体の部位によっても変化する。それだけ脳への刺激が多いことから触覚が感情を大きく動かすことも想像できる。

情報で溢れかえっている今、触覚が大切であると考えている。さらに時代は接触せずに物事をこなす方へ向かっている。「40度のお湯」ではなく「気持ちがいいお湯」、「小さい湯飲み」ではなく、「手ごろな湯飲み」といった具合に触れることについてよく考えるようになった。見て感じのいい湯飲みと、使いやすい湯飲みは同じではない。触覚を基準にした美の定規を持っておく事が豊かさに繋がる。手の感覚で感じ取れるような大きさのことを（ころ）という。僕は目の前にあるものをすぐに指先で触ってしまう。知りたい気持ちが満たされる。見えているだけの世界はどうも現実感がなく、物足りない。

僕が意識して使う、溶けるという動詞。自分とその場の輪郭線をぼかし、体を溶かし込む事は最大の感覚の拡張であり、その場になる事であると今は考えている。私はよく瞑想をするのだが、視覚を閉じ、耳を澄ませ、呼吸に意識を向ける。そうすると、その場に溶けるまでに自分の触覚と向き合うことになる。どのようなフォームで瞑想をするにしても、自分の皮膚と皮膚が触れる。僕は膝の上で親指と人差し指で輪っかをつくっているが、そうすると今ここに自分がいるという実感が強く湧く。面白いことに人は自分で自分を触らなければ自分を知覚できないらしい。そしてそれを忘れると、その場に溶けることができる。

花を見ていると、どうしてか触りたくなる。ヒトが花に触れるようになったのは毛がなくなったからではないだろうか。自分が毛で覆われている姿を想像すると植物の触り心地がまるで違ったであろうことは予想される。好きな感触も、嫌な感触もある。言葉が発達した今でも、伝えられなかった何かを植物で表現している。毛がないことを幸せに思う。

松一色（いっしき）の立花

＜表紙の花＞　健一郎

花型　除真（のきしん）立花　松一色
花材　松（松科）
　　晒木
花器　銅立花瓶

寝室で立てた立花である。5日ほどかけて少しづつ立てた。寝る時前に見て、目覚めて首を横向けるだけでそこにある。これだけ悩めるのは、生命力の強い松ならではだろう。存分に楽しむことができた。数日かけて立てたため、当初の見立てから大きく逸れたが納得いくまで向き合えた。火を絶やさないように焚べる薪割り、ジェノベーゼで使う松の実、いけばなでお世話になりっぱなしの松だが、古来から世界中で愛でられてきた。生けるだけでなく、こういった多面的な付き合いはいけばなになった時に奥行きとして現れるかはまだ分からない。

横から見た奥行

京都新世代いけばな展 2021
#ハナノコキュウ 明日へのエナジー

会期　2月20日～23日
会場　京都府立植物園
出品　桑原（くわはら）健一郎
花材　連翹（れんぎょう）（木犀（もくせい）科）
　　小手毬（こでまり）（薔薇（ばら）科）
　　椿（椿科）
花器　陶花器（市川博一作）

植物園には天井が無かった。広々とした空間に勢いのある連翹を豪快に生け、椿と小手毬を添えた。器が醸（かも）す釉薬の色が連翹の黄色とよく合う。強い風が吹くなか4日間来園者を魅了し続けてくれた。　健一郎

ストーブの前で本を読んでいるとレモンが足に乗ってきた。　（健一郎）

古代インドの壺とハス

仙溪

インドの女神ラクシュミーはハスから生まれたとされる。図①では壺から出たハスの上に立つ姿で表されているが、仏像の蓮華台座を思い浮かばせる。

前回、スリランカのガードストーンやムーンストーンを紹介したが、そのあとで南インドの仏塔（ストゥーパ）にその原型を見つけた（図⑥⑦）。

図⑥や図⑨の石板には仏塔が浮彫されている。図⑧は生命を生み出す豊穣の壺「満瓶」だが、図⑨の仏塔とどことなく似ていないだろうか。仏塔の上部が丸い壺に見えてくる。

釈迦は生前に仏塔の造り方を指示しているが（※）、それによると覆鉢を塔身の上に置き、平頭を乗せ、傘を立てて相輪を重ねた上に宝瓶を置くこととしている。仏塔自体を大きな壺とするなら、先端の壺（宝瓶）と、舎利（遺骨）容器も含めると、壺を何重にも積み重ねている事になる。まるで宇宙の象徴として壺をとらえていたかのようだ。

図⑩の太陽に見える大きなハスの開花模様は、あらゆる生命の原動力としての太陽をハスの花で表現したものだろう。図④⑤のハスやスイレンの図像で、その場を生き生きと活気づかせたかったのだと思う。

壺とハスは共に生命の不思議な力そのものであり、命が湧き出る源なのだ。

日頃いけばなが空間を生き生きと活気づかせることに不思議な思いを持っていたが、古代インド人は壺や花の持つ力をすでに強く感じ取っていたのだ。

（※）根本説一切有部毘奈耶雑事・巻第十八に書かれている。

バールフット

①

①壺から出たハスの花に立つラクシュミー像。２頭の象が女神の左右から水（ガンジスの聖水）を注ぎ祝福をする灌頂の構図。「ガジャ・ラクシュミー」と呼ばれている。中央インドのバールフット出土。紀元前２世紀。インド国立博物館。

出展：① https://ja.m.wikipedia.org/wiki/ ファイル :Gajalaxmi_-_Medallion_-_2nd_Century_BCE_-_Red_Sand_Stone_-_Bharhut_Stupa_Railing_Pillar_-_Madhya_Pradesh_-_Indian_Museum_-_Kolkata_2012-11-16_1837_Cropped.JPG

サーンチー

②

釈迦の遺骨は初め８つの仏塔（ストゥーパ）に分けられていたが、紀元前３世紀にアショーカ王が７つの仏塔の遺骨を取り出して８万４千の仏塔を建てて安置したという。中央インドのサーンチーに建てられた８つのうち３つが残っている。

②仏塔の１つ。塔門や玉垣（欄楯）は紀元前後に増やされた。

出展：②③④⑤ https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_by_category/1049

⑤

④

③

③塔門には仏伝図や本生図のレリーフが。④壺からハスが生え出る図像「満瓶」。⑤熱帯スイレン（？）が亀の口から生え出ている。

アマラーヴァティー

⑦

⑥

インド南部、クリシュナ川流域にあるアマラーヴァティーでは紀元前３世紀から紀元３世紀の建造物が発掘されている。大乗仏教を体系化したとされるナーガールジュナ(龍樹)ゆかりの地である。⑥アマラーヴァティー仏塔の装飾石板。仏塔がどのように造られたかが分かる。下中央にムーンストーン、その左右に壺がある　⑦別の石板にも満瓶（プルナ・カラサ）が確認できる。仏塔内部で宝輪のある玉座を崇拝している。

出展：⑥⑦⑧⑨⑩⑪ https://vmis.in/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati　マドラス博物館所蔵

⑨

⑧

⑧仏塔の柱断片の満瓶。ハスとスイレンが生え出た上にライオンと釈迦を象徴する玉座が積み重なる。　⑨釈迦入滅後建てられた８仏塔の１つラーマグラーマ仏塔（ネパール南部）の浮彫。蛇神ナーガが守護していたため、アショーカ王はここだけ舎利の取り出しを諦めた。

⑪

⑩

⑩玉垣の彫刻。日の出のようなハスの開花模様が彫られている。その下に怪魚マカラの口から植物が生まれ出る様子も。
⑪仏塔の模型。四方に門があり、どの方向から見ても図⑥の石板のように見える造りになっている。

桑原専慶流いけばなテキスト693号　2021年3月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

桜一色の立花

仙溪

花型　除真立花
花材　八重桜（薔薇科）
　　貝塚伊吹（檜科）
　　鳴子百合（百合科）
花器　銅立花瓶

今年も桜の咲く季節が巡ってきた。数年前から各地に植えられているカワヅザクラが、2月のまだ寒い頃から先駆けとして目を楽しませてくれた後で、いよいよお待ちかねのソメイヨシノが一斉に咲き始める。

ソメイヨシノは江戸時代末期に江戸の染井村で生まれた品種で、エドヒガンとオオシマザクラの雑種が交雑してできたそうだ。

エドヒガンには山梨県の神代桜や岐阜県の薄墨桜など、千年を超える長寿の桜がり、京都円山公園の枝垂れ桜もエドヒガンの仲間だ。

人の寿命を遥かに超える大きな桜が人々の心に平安をもたらしてくれる。

大振りの八重桜を切り分けて、他に花を混ぜずに桜一色立花にした。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
4月号
No.694

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

ザ・ニホン

＜2頁の花＞　仙溪

花材　啓翁桜（薔薇科）
　　椿（椿科）
花器　耳付陶花瓶

日本で器に花を挿す文化が根付きはじめた頃、すでに桜と椿を一緒にいけていただろうか。どちらも日本では古より春を教えてくれる木であった。ザ・ニホンと呼ぶに相応しい花木だ。そんなことを考えながらいけていると、まさに日本をいけているような、しみじみとした気分になってくる。

しかし、日本文化と呼ばれるものも他国の文化の影響を強く受けている。梅や桃、牡丹や芍薬、菊ですら古く中国から伝わった植物だし、このケイオウザクラも日本と中国の桜を親に持つ品種である。

様々な文化を受け入れ、育み、独自に発展してきたものが日本文化だと考えれば、いけばなが今後どのように変化してゆくのか楽しみになってくる。

何を守り、何を変えるか。自分自身に問いながら。

照葉椿（てりはつばき）

〈3頁の花〉　仙溪

花型　草型（そう）　内副流（うちぞえ）し
花材　照葉椿（椿科）
花器　煤竹（すすだけ）竹筒

テリハツバキの生花を部屋に飾っておいたら、いつのまにか花が咲いていた。葉色も様々な色に変わり、一重（ひとえ）の赤い花と絶妙な色合いをつくっている。

いけてから一ヶ月経ち、葉も落ちはじめたものを撮影した。最初に撮った（写真左）のと比べると変化の具合がよく分かる。

このような鮮やかな景色はおそらく自然では見られないだろう。テリハツバキが私に密かに見せてくれた。そんな気がして喜んでいる。

春を迎える花

＜表紙の花＞　櫻子

花材　雪柳（薔薇科）
　　椿「岩根絞り」（椿科）
花器　陶花器

中庭の寒椿が昨年の11月18日にひとつめの花を咲かせた。一昨年より10日ほど遅かったので日付けを記しておいた。花のない時期に咲いてくれる貴重な椿だ。

この椿が冬の間中咲いてくれるお陰で、晩秋から春までの長い間、いろんな椿が咲き続けてくれる。

品種によって咲く時期が違うが、咲く順番は毎年変わらないように思う。

椿は浮かし花や掛け花になくてはならない花でもある。いけるのが待ち遠しい。でも庭の椿はあまり切りたくないが。

今年は大輪の「岩根絞り」を雪柳と取り合わせる事が出来た。雪柳と椿、桜と椿は大好きな組み合わせだ。

岩根絞りの様な派手なコントラストの花は、軽やかで伸びやかな雪柳がよく似合う。

ツバキ群生林

山口県　萩市　笠山

（2021年3月18日撮影）

ヤブツバキの群生で有名な萩市笠山は約八千八百年前の噴火でできた火山で、冷え固まった溶岩（安山岩）が、陸上では照葉樹林や海岸植生、海中では藻場を支えている。人々はその中から木材や石材、海産物を得ることで文化を育んできた。

ヤブツバキは薪や材木として重用され、切り株からは新たな枝が再生し、独特のツバキ群生林が生まれた。

江戸時代には萩城の北東、鬼門の方角にあたるため、毛利藩は笠山一体を立ち入り禁止にし、数百年間自然林になっていたが、明治になって禁止は解かれ、多くの大木は切り倒されたそうだ。

それでも数十種のヤブツバキが五千株、約二万五千本自生している。

群生林の中はツバキだけの世界が広がっていた。全身でツバキを体感できる。

①展望塔に上って群生林を上から見ると、太陽光で葉がキラキラと輝き、幻想的な風景が。

②苔むした溶岩と椿の樹林。葉と花が散り積もる。

③大木は切られた後とはいえ、曲がりくねった幹に年輪を感じる。

椿一色の立花

＜5頁の花＞　健一郎

花型　除真立花
花材　椿（椿科）
花器　陶花器（市川博一作）

萩の旅行へ行く1ヶ月ほど前に立派な椿に巡り会えた。

枝ぶりはいけばなで表現する分には格好があまり良くないが、一枝単位で見ると上品である。

厚みのある立花で椿の良さを出せるのか危惧していたが、それなりに良さを出せたのではないかと満足している。

自分が椿の木を見て感じている良さを一枝で見せるのは難しい。今の僕が試みても、一枝では自分の思う椿には見えないだろう。

副が大振りだったので控枝を流枝と請の間から覗かせた。

最近、面白い枝と出会うことを心より楽しんでいる。

六色椿（ろくしきつばき）

＜6頁の花＞　健一郎

花材　椿6種（椿科）
花器　陶花瓶（木村盛伸作）

五色椿は紅・白・桃色の3色を基本に、一本の木で様々な変化に富む花が咲く。一枝一枝に見応えがあり、散りゆく姿は色鮮やかで、寂しさを感じさせないようにしているかのよう。

今回出逢えた6種の椿はみな生き生きして見えた。小さな器に溢れんばかりの椿たち。

椿寺で見た五色八重散椿が見事であった。実際に木を見ると、切り花の印象がまるで変わる。

白花満作（フォザギラ・マヨール）

＜7頁の花＞　健一郎

花材　白花満作（満作科）
　　椿（椿科）
花器　陶花器（ティム作）

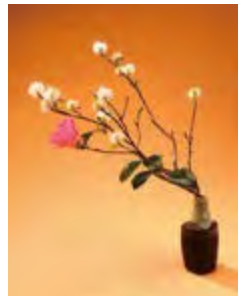
白花満作（フォザギラ・マヨール）は北

アメリカ原産で、4月から5月にかけて花を咲かせ、秋には満作に似た紅葉の葉が綺麗らしい。初めて生けたが、独特の香りと花がお気に入りである。

ツバキは葉を省略し、蕾も落とした。花と残った葉が目立ち、シロバナマンサクの花が良く映える。

個人的に、オレンジ色の背景が椿とフォザギラ・マヨールの良い出会いの場になったと感じている。

和のテイストを取り入れたティムさんの器がその雰囲気に馴染み、説得力に力を与えている。



出逢い花（40）

仙溪

小手毬（こでまり）（薔薇（ばら）科）
芍薬（しゃくやく）（牡丹（ぼたん）科）
花器　ガラス花瓶
（鈴木玄太作）

小手毬も芍薬も中国伝来の植物。シャクヤクは中国で紀元前にすでに園芸植物としての記録があり、花の観賞とともに根は漢方薬として利用され続けている。コデマリが中国でどのような歴史を持つのかわからないが、日本には江戸時代初期に伝わっていて「立花時勢粧」にも記載がある。

シャクヤク1本とコデマリ1本をガラス花瓶に挿してみた。シャクヤクの丸い花にコデマリの丸い花。あえて器にも丸い飾りのあるものを選んだが、互いに響き合う感じが気に入っている。

『嗅覚』

健一郎

菜月の誕生日に2人で香水を作りに行った。2～3種類の匂いを調合師さんにお願いして足してもらうのだがこれがなかなか面白い。眼に見えない匂いと匂いの足し算は想像が難しかった。「こっちの香りを強くしたいです。」「もう少し鋭く。」「もっと爽やかに。」様々な言葉が飛び交う。自分が作りたい匂いが明確でないため、調合してもらうたびに好みも目指す匂いも変わる。好きな匂いと好きな匂いを足せば好きな香りになるというわけでもなく、人に伝えずらい感覚を言葉にし、出来上がっていく香水の調合には可視化できない楽しみがそこにあった。

人は息をしている以上、匂いから逃れることはできない。目や耳は塞げばいいが鼻をつまんでの口呼吸はそう長くは出来ないだろう。ダイビングをする時は口呼吸のみだったが、陸で口呼吸をすると口腔内が乾燥する。

人間社会の近代化と匂いは密接な関係だったに違いない。生活排水や廃棄物の処理方法が再検討された。コンクリートで密室化した部屋を各自で管理することになった。人が感じ取ることができる匂いを減らすことが都市化において大きな課題だっただろう。空調機や消臭剤で町は溢れかえっている。そのおかげで私自身、京都で生活をしていると匂いに対してのストレスが年に一度ほどしかなくなってしまった。五感のうち一番衰えているのだろうと予測している。その一度とは祇園祭の巡行の日である。前日までの夜店や屋台から出た汚れの匂いがアスファルトにこびりつき鼻につく。

夕暮れ時に、一軒家が連なる場所を歩いていると、魚を焼くにおい、お風呂に浸かり水が溢れ出る音が見えずともありありと情景が浮かぶのが面白い。プライバシーがあやふやで、近代化以前の日本を思わさせるような光景に近い気がする。お隣さんの生活音、臭が感じられるとそばにいた事を思い出させる。心なしか、そういった地域を朝、昼に歩いているとよく、賑やかな井戸端会議を見かける。

私自身、過度な無臭化はあまり好みではない。その家、その家の匂いが好きで、匂いも文化であると思っている。きのこ嫌いの私にとって、星を見にいくべく飛騨行きの電車に乗った際、乗客が一度に食した加熱式の松茸釜飯弁当の匂いに耐えられなくなったりと、良いことばかりでもないが。心地よい匂い、不快な匂いは人によって変わる。魚を焼く匂いが海外で受け入れられない話もよく聞く。日本以外の土地へ訪れた際、飛行機を降りて一番初めに接する文化はその土地の匂いである。滞在するとすぐなれるのだが、鼻が慣れるまでが楽しい。

ラフレシアは動物の死臭に擬態しているという説がある。ラフレシアはその匂いで媒介者の蠅などを誘き寄せている。強烈な匂いは、その場にて圧倒的な存在感を出しているのだろう。人は強いニオイを消すことに多くの時間を費やした。そして芳香剤や、香水で自分の思う匂いを纏う。

今回、菜月はNo.309と自身の生誕の日を香水瓶のラベルに貼っていた。彼女は何かを惹きつけるためではなく、自身の好きな匂いを纏いたかったと言っている。満足そうだ。

今、匂いがない環境は整っている。そこに何の匂いをのせるのか。「あ、金木犀。」「あ、今日は魚や」「もう雨降りそうやな」心地の良い匂い。良く思わない匂い。嗅覚は意識しなければ知覚できないほどまでに無臭化されている。なので感覚が鈍ってしまう。

狩猟時代は匂いを頼りに生活していた。視覚や音だけの情報ではこと足りないからだ。五感の中で特に、退化しつつある嗅覚を意識すると、今生きている世界に奥行きを感じ取ることができ、面白い。季節、人の体調、時間、場所を匂いで感じたい。人がいなくなったことを確認してマスクを外す時間が好きだ。

フキノトウとレモンちゃん
（2月15日撮影）

エジプトの青いスイレン

仙溪

仏教の経典に出てくる青蓮華はハスではなく青い熱帯スイレンだ（図①）。古代インドの遺跡にはハスと共にスイレンも浮彫されていた（前号参照）。この青いスイレンにはどんな背景があるのだろう。

青いスイレンと言えば古代エジプトだ。毎年ナイル川が氾濫することで生まれる肥沃な大地が、豊かな文明を育み、人々は自然界に様々な神の力を感じ取った。

朝に咲き夜に閉じる青スイレンや夜に咲き朝閉じる白スイレンは、死と来世での再生を連想させた。スイレンは神々と結びつき神聖な花となった（図⑤）。

ツタンカーメンの棺に残された花襟（図⑥）には様々な植物が織り込まれていてスイレンも加えられている。スイレンから生まれる像までも（図⑬）。それらは蘇りの祈りの現れだろう。

熱帯スイレンには良い香りのするものが多い。彼らはスイレンを池や沼で栽培し、花から香料を抽出した。青スイレンの香りには鎮静作用があるらしい。花の香りを直接嗅いだり、葬儀の花束（図③）や神殿の捧げもの（図⑪）、女性の花飾り（図⑩）などとして利用した。

人々が集まる部屋にスイレンを生けることもあったのではないだろうか。神秘的な甘い香りが広がるように。

色々調べてみて、エジプトとインドの関連性を感じている。スイレンやハスと神々との関係。再生を願う花襟（図⑥）とインドのハスの開花図像（前号11頁・図⑩）の類似性。香りの良い花を供えることや、良い香りを体に塗ることも共通している。

エジプトのスイレン信仰に、生命の根源としての「壺」がインドで加わり、仏教と共に日本へ来ていけばなへと昇華した。そんな大きな流れを想像している。

①熱帯睡蓮（エジプトロータス）

出展：「花の王国１園芸植物」荒俣宏著／平凡社

饗宴の図。青いスイレンの香りを嗅ぐ女性。

スイレンのブーケを持つ女性。

沼地での狩猟の様子。左にパピルス（猫も）、足元にスイレンが見える。

出展：②③④書記官ネブアメンの墓壁画、B.C.1350。⑪予言者ユーザーハットの墓壁画、B.C.1294-1279。（メトロポリタン美術館の複製画）https://www.flickr.com/photos/menesje/sets/72157608008967297/with/4058204742/

⑤冥界の神・オシリスの足元から出る白スイレン。パピルスに描かれた「死者の書」（フネフェルのパピルス）の一部。B.C.1275。（大英博物館）

出展：⑤ https://www.britishmuseum.org/collection/object/Y_EA9901-3

ツタンカーメンの棺の花襟。メトロポリタン美術館。出展：https://www.metmuseum.org/art/collection/search/684769

テーベのレクミラの墓壁画、B.C.1479-1425。クレタ島から来たミノス人使節団。様々な金属器の贈り物を持っている。

出展：⑦ https://www.flickr.com/photos/manna4u/albums/72157678333466360/with/32544493391/

ファイアンス・ボウル。B.C.1550-1458。四角い池の周りにスイレンが描かれている。エジプト・ファイアンスは古代エジプトの鮮やかな青緑色の焼き物。

葦の束形のアラバスター。スイレンを挿すため？ B.C.15th。高さ 6.5cm。

⑦の部分複製画。スイレンの造花が立てられた器。出展：https://www.metmuseum.org/art/collection/search/544609

センウセレト 1 世のピラミッドより。供物室のスイレンの鉢。B.C.1961-1917。

スイレンの頭飾り。

⑮スイレンから生まれる太陽神の子。象牙。B.C.8th。
⑯スイレンの神、ネフェルトム。銅。B.C.332-30。

スイレンから出現するツタンカーメン

スイレンの造花。木製。高さ 8cm。B.C.2051-1981。

出展：⑨⑪⑫⑭⑮⑯　https://www.metmuseum.org/art/collection/　（メトロポリタン美術館の公開データベース）
⑬ https://www.flickr.com/photos/manna4u/albums/72157666023968570/page3

桑原専慶流いけばなテキスト694号　2021年4月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

エジプトの器

＜12頁の花＞　仙溪

花材　ミモザ（豆科）
　　ラナンキュラス（金鳳花科）
花器　銀象嵌真鍮瓶（エジプト製）

古代エジプトでは王の棺をアカシアで作ったそうだ。アカシアは不死のシンボルとして神聖な木であった。アカシア（Acacia）の名はギリシャ語の「尖らす」に由来するそうで、アフリカのアカシアには棘のあるものが多い。

アカシアの仲間はオーストラリアにも多く、ギンヨウアカシアやフサアカシアが花材になっている。両親が「花ふたり旅」で使ったエジプトの器に、ギンヨウアカシアをいけた。アフリカのアカシアのように棘は無いが、黄色い花が金銀の器に豪華に映る。エジプトの神々も喜びそうだ。地中海沿岸原産のラナンキュラスを加えて、古代エジプトの華麗な文化に思いを馳せている。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
5月号
No.695

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

アリウム・シルバースプリング

＜2頁の花＞　櫻子

花材
アリウム・ギガンチウム（百合科）
アリウム・シルバースプリング（百合科）
黄花アイリス（菖蒲科）
エメラルド・ウェーブ（茶筅羊歯科）
花器　ガラス花器

玉ねぎやラッキョウ、ニンニクが仲間のアリウム属の花は種類も多いが、それぞれにとてもきれいな花が咲く。百合科なので小さな六弁の花が球形になり花火の様にも見える。

毎年色んなアリウムに出会うが今年はシルバースプリングという中心に赤色が混ざるアリウムを見つけた。

アリウム・ギカンチウムと取り合わせると、畑に咲くネギの花が並ぶ感じ。初夏の青空の下で元気いっぱい咲いてくれるようで力強い。アリウムの葉は畑に残され太陽を浴びて栄養を球根に送る役割をする。代わりにエメラルドウェーブという葉を添えた。

木苺と撫子

〈3頁の花〉　仙溪

花型　生花　株分け

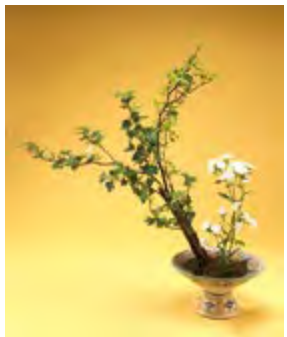
花材　木苺（きいちご）「構苺（かじいちご）」（薔薇（ばら）科）
撫子（なでしこ）（撫子科）

花器　陶コンポート（モロッコ）

春に生まれた若葉もだんだんとしっかりしてきた。初夏の爽やかな空気を吸って、植物も人も心地よく伸びをする、そんな季節である。

作例は4月初旬にいけたものだが、キイチゴのまだ小さな葉が初々しい。このあと白い五弁花が咲いた。一種では少し物足りないので、白花のナデシコと株分けにした。

庭木がぐんぐんと伸びる季節。初夏の優しい花をつけた木々は、格別ないけばな花材になる。いずれ剪定するのなら、今切って部屋にいけて楽しみたい。そんな時の作例に。



ななめ横から見た奥行

オクロレウカ

＜4頁の花＞　健一郎

花型　生花「三花五葉」

花材　オクロレウカ（菖蒲科）

花器　結晶釉鉢（前田保則作）

アヤメ科の葉組ものの場合、真、胴、留に花を使うのが基本ではあるが、長大アイリスと称されるように、一際大きいこの花の伸びやかさを表現したくて、真、副、胴に花を使った。

花を固めたため、留の葉は大きく動きをつけ、控枝の葉は中高にした。

オクロレウカは花の茎についている葉の中にも花が隠れている。一本の花で4～5回も花を咲かす。虫たちに気がついてもらえる回数、期間を増やすための工夫であろう。花はただでさえ切り落としにくいものだが生花の線を妨げないよう隠している。長い間楽しませてもらった。

初夏を盛る

＜5頁の花＞　健一郎

花材　太藺（蚊帳吊草科）

紫陽花（紫陽花科）
姫百合（百合科）
花器　陶花器

初夏らしい一作。花の取り合わせによってはその季節を強く説明するものになる。良い季節が始まる。季節と季節に明確な区切りはなく、曖昧なものだ。そのせいか今日から夏が始まるといって夏は始まらない。あっという間に一年が過ぎるわけである。最近、季節の花が身によく染みる。

瀬戸内の島で育ったレモンをいただきました。レモン&レモン。

薇と千鳥草

〈6頁の花〉　櫻子

花材　薇（羊歯の若芽）
　　千鳥草（金鳳花科）
　　紅羊歯（雄羊歯科）
花器　陶コンポート

春の芽吹いたシダ類と初夏の花を取り合わせる事はめったにしない。季節がちぐはぐになるからだ。きれいであれば何でも良いとは思わない。料理と同じで美味しければ良いとは思っていない。

でも今年の様な気候がこれから先も普通になるのであれば仕方ないかもしれない。一斉に花が咲き揃ったような感じだ。季節の区切りが曖昧になり、違和感を感じながら花も料理も考えなければならないけれど、今までとは違う新鮮なものも感じていこうと思う。

若葉の赤茶色が可愛い庭のシダを、園芸種のラークスパー（千鳥草）に添えられるとは思わなかった。

人々の自粛生活が緩んだのと同じように庭の植物達も……。

『座辺師友』

健一郎

「お兄ちゃん僕の事格好よくして」と学校の入学式三日前に相談があった。彼の言う格好いいとは何か分からなかったので尋ねるとお兄ちゃんみたいになりたいとの事だった。今年で23才なのだがまだ可愛い弟だ。自分の身なりについて考える良い機会になった。

僕がオススメする服屋さんに行き、靴と腕時計も購入して美容院にも行った。私自身、素材へのこだわりは強く、良質なものを身につけたいと思っている。そして身につけるものは、友達以上師匠未満の関係が好みだ。師匠だと身につけるものとしては少し遠い気がする。もちろん値段ではなく質で判断している。「質が分かるのか？」と聞かれると困るが、今までに自分が見てきた物の中で比べている。そして量を見る意識もしている。

自分個人的な持論ではあるのだが、自分を中心に周囲の環境（人、物等）の平均値が自分なのではないかと考えている。自分が認識したものの中で生きている。そして自分が認識しているモノの影響しか受ける事ができない。自分の意思が明確であればあるほど身を置く環境を選択し、作り出す事ができる。

物から影響を受けようとしても良いものが何か分からない。まず初めに身の回りの耳障りなもの、目障りなもの、肌触りの悪いもの、美的感覚にそぐわないモノを自分から遠ざけた。次に、全て自分が納得できるモノのみ身の回りに置くことにした。これを繰り返す。考え方が変わると、必要なモノも変わる。

お気に入りのモノと過ごす日々が心地良い。菜月と相談しながらではあるが、合わせてくれることが多い。今の自分に必要なモノを自分の周りに置くと頭がよく冴える。思考が現実化しているような気さえする。頭と実際の場にタイムラグができないように気をつけている。

本を読みその時自分が必要な物を吸収すると、次の人に譲る。また必要になればもう一度同じ本を買う。積読（つんどく）に囲まれて生活している。本棚を見ると好奇心を強く刺激され何から読もうかと悩む時間も楽しい。読み進めていくと捨てられない本が出てくるが、稀である。本棚は少し先の自分を写す鏡のようにも思える。

運動していて上手な人とプレーすると、自分も上手なのではないかと勘違いしてしまう事が度々ある。知識が豊富で論理的に話をする人と会話をすると自分が賢くなった気がする。そしてそういった人に釣られて少しづつ上達する。

こういった僕の考えと近い言葉がある。「坐辺師友」端的で分かりやすい。魯山人の言葉である。優れた人、物に囲まれて生活しているとその心をおのずと学びとることができ、自分の周りのすべてが師であり、友であると言う意味だ。

今生きている人の中だけで数多くの師匠を探すことは難しい。言葉を発せぬ先人たちの想い、言葉を話す必要のない植物やモノの声にならぬ声に耳を傾け師とすることができれば多面的に物事を捉えることができ、考え方に厚みがでる。言葉を話す師匠から学ぶことは多いが師匠の数が少ない。話さぬ師匠が増えると心強い。耳がよくなればなるほど多くの事が学びとれる。本人が自覚していなかったものまで学べる可能性すらある。自分が託す側になった時に師匠がいないのは少々不安だ。

自分の限られた時間を誰と何に囲まれて過ごすことが自分にとって大切なのだろう。今私は多くのことを吸収している気がしている。直ぐに忘れてしまうが、体のどこかに何かしらの形で残っているだろう。良き物、良き人に囲まれ好きなことばかりしている。日常が尊く愛おしいものになった。

グループホームで利用者さんと過ごす一瞬は同じ時間であっても僕がこれから生きる時間とその方が生きる時間には大きな隔たりがあるように思う。同じ時間ではあるが、終わりが近づくと途端に、惜しいものに感じられる。これから僕が100歳まで生きるとなると後75年くらいある。だが30歳までと考えると、1ヶ月後までと考えると1日の密度が変わるのはおかしくないだろうか。平均寿命50歳だった時代に生きていた今100才を超えた利用者さんはどんな気持ちなのだろう。自分が予定していた寿命との隔たりに僕なら戸惑う。

菜月はよく出かける僕を見送ってくれる。わけを尋ねると私が今にもいなくなりそうだからだという。自分でも思うところはあるが、後悔だけは無いよう生活をしたい。良き物、人に囲まれる事は、後悔しないための仕組みづくりとも考えられる。弟に良き物、人が集まることを願っている。

「桜をいける」

＜8頁の花＞　5人合作

コロナ禍でもいけばなを楽しんでもらおうと、春恒例の華道京展を野外ですることになった。

皆さんと競うように同じ場で花をいけるのは本当に久しぶりだった。

桜づくしのいけばな展！

世界遺産の二条城で！

先の植物園もそうだが、文化行政の協力あってのことと感謝している。

花材　八重桜（薔薇科）
　　満天星（躑躅科）　薮椿（椿科）

花器　彩泥花器「膨風」宮下善爾作

風を感じるように

＜表紙の花＞　仙溪

花材　菖蒲（菖蒲科）
　　山躑躅（躑躅科）

花器　朱塗コンポート

いけばなでは、立ち枝、横枝、下がり枝など、もとの姿を想像しながらいけることになるが、下へ下がる枝をいけるのはなかなか難しい。

コデマリのようにいったん立ってから下がる枝はいいのだが、下がり枝のみの場合は枝を撓めないといけられない。

ヤマツツジの下がり枝の途中に針金をそえて曲げてみた。茶色のフローラルテープで仕掛けを隠し、その前にアヤメの葉を立てて目立たなくしている。

手間をかけたおかげで変わった花型ができた。扱いの難しい花材ほど、工夫して生かせると面白い花になる。

山からの清浄な風で邪気を吹き飛ばしてもらえるように、疫病退散の願いをこめて、赤い器にいけた。

深山の空気

仙溪

久しぶりに深山の空気を吸ってきた。30年ぶりの大台ヶ原。晴天のもと、山道を標高１６９５ｍの日出がケ岳をめざす。といっても駐車場からの標高差は１２０ｍほど。気持ちのいい山歩き。

辺り一面ミヤコザサの中を歩く。このササが地面を覆ってしまうと、他の樹木の発芽ができなくなってしまうのだが、昔、台風による倒木を搬出したことがきっかけで、林床が乾燥し、コケ類が大幅に減少してササの天下となってしまったそうだ。更にササを求めて鹿が増え、樹皮が食べられて森の消失が加速する。

それでもツツジの仲間は頑張っていた。シロヤシオ、アケボノツツジ、ツクシシャクナゲ、サラサドウダン、コアブラツツジ、トサノミツバツツジ、ヒカゲツツジ、等々。花が咲いたらさぞ素晴らしい景色が見られるに違いないが、４月下旬なのに山はまだ晩冬の様相。花の季節に是非また来たい。

過酷な山道を車で走って大峰山の修験者が泊まるという洞川温泉で１泊。湧水ゴロゴロ水をいただいて、龍泉寺、天河大弁財天に参詣し、家族の健康と花技上達を祈願して帰路についた。

大台ヶ原の絶景ポイント、大蛇嵩（だいじゃぐら）。深い谷底の向こうに山並みが迫る、神聖な空気を感じる場所だ。このあたりにはコウヤマキ、ゴヨウマツ、ツクシシャクナゲが見られる。（奈良県吉野郡）

ミヤコザサに覆われた山肌に立ち枯れた木や倒木が白く残る。屋久島にならぶほどの多雨地帯なのに、森が消えていた。正木峠付近。

途中、ツツジのトンネルを抜けていく。またいつか、花の季節に訪れたい。（4月21日撮影）

1963年撮影の正木峠。（説明板より）昔は苔むす森だった。現在、森林再生の試みがはじめられている。

丹生都比売神社
花盛祭（はなもりさい）　仙溪

ぶらりと一人旅。

花盛祭という名前に惹かれて、高野山の入口にある丹生都比売神社を参拝してきた。（JR笠田駅からバスで30分）

弘法大師空海が高野山に金剛峯寺を建立するにあたって、丹生都比売神社が神領を寄進したと伝えられ、高野山と深い関係にある神社である。

花盛祭はご祭神に花を供え春の訪れを寿ぐ祭りで、季節の花が参道を飾り、神前への供物にも花が添えられる。祝詞奏上、子供達による神楽舞、参拝者の玉串奉奠がおごそかに行われた。

この地は「紀伊山地の霊場と参詣道」の一つとして世界遺産に登録されている。その理由の一つに「神仏習合」がある。お山への信仰心と仏教とが融和した場所。水の神、山の神に感謝し、花を供える。仏前の供花も同じ心で行われていたのだろう。今も昔も、花が人の気持ちの橋渡しをしてくれている。

清々しい青竹に季節の花が。高野山で空海が催した万華会と関係があるのかも。

㊧花を浮かべた石の花瓶。拝殿両脇にあり、古代インドの満瓶を思わせる。

子供神楽の奉納。平安を願う浦安の舞だ。雅楽に鈴の音が重なる。桜の挿頭（かざし）に春を感じる。

樹齢600年以上、近畿最大の巨樹「十五社の楠」。笠田駅から徒歩5分。かつて十五社明神が鎮座する妙楽寺の境内だったが、今は楠の下に小さなお堂が一つ。

和歌山県伊都郡かつらぎ町のJR笠田駅で下車。柿、梅、桃、梨、りんご、ぶどう、みかん等の畑が点在する。

桑原専慶流いけばなテキスト695号　2021年5月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

アメリカの思い出

＜12頁の花＞　仙溪

花材　アメリカ手鞠下野（薔薇科）
　　石楠花（躑躅科）
花器　花崗岩花器

仙齋・素子の写真集『花ふたり旅』にも使われている石の器。花崗岩を丸く削り、穴が彫られている。かなり重たいのだが、冬のワシントンで購入して撮影に使い、その後私がリュックに入れて家まで持って帰ってきた。

『花ふたり旅』ヨーロッパ撮影では、飛行機トラブルで予期せずシカゴ近郊で1泊したが、宿の前にシャクナゲが美しく咲いていたのをよく覚えている。6月初旬のことである。

そしてこの作例。花屋でアメリカテマリシモツケ（オウゴンコデマリ）の面白い枝とシャクナゲを見つけた瞬間、自分の中の「アメリカ」が一つの形になった。シャクナゲの名前に石の字が入っていることも、きっと作用しているに違いない。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
6 月号
No. 696

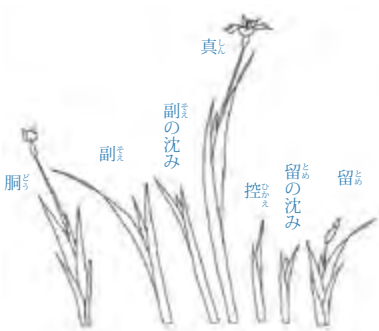
編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

初夏の杜若

<2頁の花> 仙溪

花型　生花　行型　三花七葉
花材　杜若（菖蒲科）
花器　陶水盤

初夏のカキツバタは花を葉よりも高くして、葉にも動きをつけ、生き生きとした姿にいけたい。花は真、胴、留に。いけ終えたら小石で剣山を隠して水を足す。



初夏を生ける

＜3頁の花＞　健一郎

花材　いろは紅葉（もみじ）（楓科・ムクロジ科）
　　芍薬（しゃくやく）（牡丹（ぼたん）科）
花器　陶花瓶

青楓。夏の風物詩である。遅咲きの桜が出る頃に葉を少しずつ硬くする。拳（こぶし）を握りしめた状態から少しずつ手を広げていく。

大ぶりの豪華な芍薬と取り合わせた。返り枝で楓は撓（た）めがきかないため素直にそのまま立てて、幹を見せず葉をよく見せた。

光に照らされると葉の良さが際立つ。芍薬の葉、楓の葉どちらもみずみずしく沢山の緑の中に花が浮き立っているかのようだ。水色の背景が表現に広がりを持たせてくれている。

横から見た奥行き

山野草の立花

＜4頁の花＞　仙溪

花型　除真立花
花材　京鹿の子（薔薇科）
　　夏櫨（躑躅科）
　　山紫陽花（紫陽花科）
　　下野（薔薇科）
　　晒木

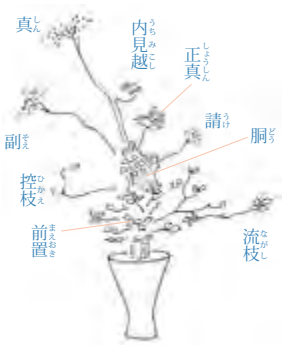
花器　黒釉陶花瓶

季節の草花を主材にした立花。夏山で出逢った草木の記憶をたどって立てた。

ナツハゼをいけるとき、登山の途中で実を見つけて食べたことを思い出す。酸っぱさが疲れを吹き飛ばしてくれた。尾根筋の風通しのいい心地よい場所だったのを覚えている。

さまざまな木々が山歩きを励ましてくれる。そして奥山の開けた場所に咲く花たちに感動する。

そんな気分が伝わりますように。



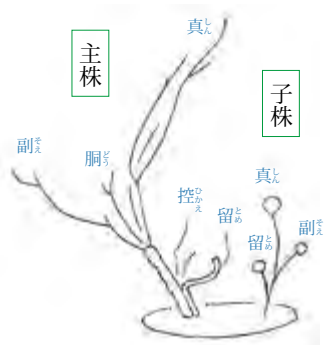
裏白の木　芍薬

＜5頁の花＞　仙溪

花型　生花　株分け
花材　裏白の木（薔薇科）
　　芍薬（牡丹科）
花器　松樹天目深鉢
　　（木村盛康作）

鎌倉時代、中国の天目山からもたらされた黒褐色の茶碗が「天目茶碗」と呼ばれた。窯変天目や油滴天目が有名だが、京都の陶芸家、木村盛康氏は苦心の末に松の木肌のような模様を生み出し「松樹天目」と名付けられた。

その松樹天目の大鉢に、山の木と里の花を株分けでいける。花たちも気持ちよさそうだ。平然と草木の命を受け止めてくれる懐の深い器。私に心地よい緊張を与えてくれる、ここ一番の大切な存在。いい器だ。



大山蓮華を生ける

＜6頁の花＞　健一郎

花材　大山蓮華（木蓮科）
　　鉄線（金鳳花科）
花器　青瓷花瓶（清水卯一作）

緊張感のあるお花を生けるときは相応の器で生けたい。飾ると部屋の香りが大山蓮華に支配された。家の中で広がる香りは人を惹きつける。香りが弱くなると花は散る。ほんの数日であったが楽しませてもらった。

大峰山に自生しているので季節になるとどんな景色が広がっているのだろう。楽しみである。

鉄線の濃い紫が大山蓮華に対していささか強い気がするが、お互いの良さが際立つ。

横から見た奥行き

酢の木、夏櫨。

〈7頁の花〉　櫻子

花材　夏櫨（躑躅科）
　　鉄砲百合（百合科）
　　撫子（撫子科）

花器　陶花瓶（宮下善爾作）

ナツハゼはスノキ属。葉や実が酸っぱい木なのでスノキ。ブルーベリーもスノキ属だ。スノキ、ウスノキ、ナツハゼ、オオバスノキ等が夏櫨の名前で切り枝になる。ユリとナデシコを合わせて自然調にいけた。

レモンちゃんと白いダリア。きれいだな。

『笑み』

健一郎

認知症対応型共同生活介護（グループホーム）での生活が楽しくて仕方がない。そんな日常でたくさんの発見をよくする。

笑いは生きる活力であるのではないかとつくづく思う。笑うことで気分が晴れ、何かしてみようかなとなる。日常でちょっとした笑いでいい。利用者さんと生活をして2年ほどになるが笑いを無意識的に仕掛けてしまうようになってしまっている。

記憶が繋がらず、目の前で不可解なことばかり起こる世界に生きている利用者さんはいったいどんな気持ちでいるんだろう。僕には未知の世界だが、それでも想像することはできる。自分の時間だけが止まっていて周りは動いている状況である。講義中に寝ていたところを、先生に「この問題を解いてみろ」と言われるようなものである。説明を聞いていなかったのに解けるはずもない。だが周りの人たちは確かに話を理解している。僕なら何だかわからないが周りに話だけ合わせておき、間に合わない現実に自分を取り繕うだろう。そんな不安な人に安心感を持っていてほしい。なんだか、ここにいたら落ち着くな。悪くはないな。と感じてもらえることを目標にしている。

笑いをつくるためにはまず土台が必要だ。安心感である。つまり笑顔だ。笑顔は敵意がない事を相手に示し共感を示す。多民族国家のアメリカではエレベーターなどで顔を合わせた時Hiと声を出して笑顔を作るのは素性の分からない相手の警戒心を解き、その場を安全な空気にするためである。これは故意に安心感をつくる笑顔である。自分の笑顔が良い笑顔だと相手の笑顔も良くなる。安心感が笑いの根底をつくる。緊張していたり、怯えていると上手く笑えないことを考えると何となく想像できる。無理して作った笑顔が相手に伝わると不信感に変わってしまう。

安心感がないと笑いに繋がらないのは不審者にくすぐられても笑いに繋がらない事を考えると想像しやすい。

まず安心感をつくる。そうすると僕がそばにいる事を許される。そして次は安心感を笑いに変えていく。

笑いには大きく分けて2種類ある。言葉の笑いと動作の笑いである。言葉による笑いで笑うにはある程度の認知能力が残されていないと難しい。なので主に動きによる笑いに言葉を少し付け足すような形で笑いを作っていく。

まず初めに、笑いを共有したい相手が、会話の中で使う言葉に注目する。人は言葉によって思考する。言葉がその人なのだ。言葉はその人の世界の区切り方である。その人の世界がどんな世界で生きているかの参考になる。そしてその人の興味関心に気がつく。もちろん完全にその人を解ることはできないが側に寄るイメージだ。相手の理解しやすい言葉を相手の思っている意味で使う。この際、言葉の本当の意味はどうでも良い。私も難しい話をされたら分からないし、緊張する。まず相手の使う言葉や語彙をある程度把握し、その人の世界に入り込む。利用者さんの世界は大雑把で物と物の区切りが朧気でぼやぼやしている。その人に寄り添うとその人は自然と笑う。そして事あるごとにおどけて冗談を言い合っている。

動きの笑いは喜劇映画のチャップリンをイメージするとわかりやすいだろう。動きの不調和が笑いを生む。コミカルな動きで不調和を作り出す。例えば、介護をしていた職員が、次の瞬間に車椅子に乗って現れたら、さっきまでの行動との不調和と安心感があいまって笑いにつながる。

ここ最近、笑い方が変わった。引き笑いをするようになった。菜月に指摘されてきがついたのだが、それは多分、無意識で相手に笑っていますというサインを誇張した形なのでは無いだろうか？

ただ毎日が笑うだけで終わることを望んでいるわけでもない。不安な気持ちを抑えつけて表出させないわけではない。ずっと笑っている世界も不気味だろう。何もない隙間の時間、瞬間、瞬間の何でもない時間を笑顔にしたい。

道路を歩きすれ違う人のマスクで隠れているが、その人の笑う顔を想像する事がある。気難しそうな人も、怖そうな人も笑うといい顔になる。常に自分を整えているとある程度の余裕ができてきた。自分で整えているつもりだが、身近な人が整えてくれているのに気がついていないだけかもしれないが。

グループホームで働くようになってから人が好きになった。悪いところも良いところも全部ひっくるめたありのままのその人が好きだ。そして、その人はその人らしく生き生きとしている事が気持ちよい。

梅雨空のパラソル

＜表紙の花＞　櫻子

花材　ベル鉄線（金鳳花科）
　　毬栗菅（蚊帳吊草科）
花器　ガラス花器（ベネチア）

小さくてもキリリとした姿で咲くベル鉄線。大輪の鉄線にも負けないくらいの存在感がある。ガラス器にいけて庭で育てたイガグリスゲを添えると優しい洋風の雰囲気に。

きらきら光る水たまり。赤いレインシューズをはいた幼な子がパラソルを持って遊ぶ風にも見えて。

横から見た奥行き

生命を生み出す豊穣の壺
プルナ・カラサ

仙溪

花と器の図像を時代を遡って探すうち、古代インドのプルナ・カラサ（満瓶）にたどり着いた。それはどうやら宇宙、生命の母胎のイメージが込められた、エネルギーに満ちあふれるもののようである。

仏教が起こり、釈迦の教えを伝え継ぐために遺骨を納めた仏塔（ストゥーパ）が各地につくられたが、仏塔は釈迦の墓としてだけではなく、迷いの世界を抜け出した悟りの境地そのものであり、万物が生ずる源（卵）と同一視されていたようだ。ゆえにその装飾には溢れ出る生命を表したものが多い。そしてその中でも特に大切なのが壺からハスが生まれ出る文様、プルナ・カラサであった。

インド文化省がサポートするサイトで紀元前2世紀の仏塔の装飾文様を閲覧できる。生き生きとした動物や植物が石に刻まれている。どの文様も躍動感があり、デザイン的にも素晴らしいので一部を転載させていただいた。プルナ・カラサ（③④⑤㉒）は他にも8つ紹介されていた。特に大切な文様なのだろう。

壺から命が湧き出る。命の水が湧き出る。プルナ・カラサにはそんなイメージが込められている。

サーンチーの第２仏塔。石の玉垣に様々な文様が彫られている。

出展：①⑰ https://www.greatmirror.com/index.cfm?navid=748

紀元前３世紀にアショーカ王が建てた仏塔が中央インドのサーンチーに現存している。紀元前２世紀以降に増築や玉垣・塔門が追加された。図②～⑯㉒は第２仏塔の玉垣の装飾文様の一部。

③④⑤㉒は壺からハスが生まれ出る文様でプルナ・カラサ（満瓶）と呼ばれる。蕾、開花、葉が彫られ、⑤には鳥も。
②は亀の口からハスが出ているが、左ページの絵㉑とイメージが重なる。よく見ると熱帯スイレンも混じっているように見える。㉑の青いスイレンの球根はまるで壺のようだ。
⑥はマカラ（インド神話に登場する怪魚）。⑦は象。⑧は孔雀。⑨は羽根のあるライオンか。
⑩から⑭はハスの様々な文様。デザインセンス抜群だ。⑮はハスの周りを２種の蔓が蛇のように絡み合う。⑯のハスの周りはトリシューラと呼ばれる三叉文様。三宝（仏、法、僧）を表す。

出展：②～⑯㉒ https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_by_category/1049

写真⑰は紀元前３世紀に仏教に帰依したアショーカ王が各地に建てた大きな石柱の先端部で、獅子の下にあるのはハスの花（開花して反り返る姿）とされているが、水が壺から溢れ出ている様にも見える。だとすれば、これもプルナ・カラサから湧き出る水が漲る生命を支え養うというメッセージが込められているのではないだろうか。王が感銘を受けた釈迦の教えを、湧き出る水で表現したのでは。

さて古代の仏塔にもどろう。表面の装飾は剥がれているが、その装飾石板（⑱）で仏塔の様子がわかる。そこにはプルナ・カラサがぐるりと取り巻き（⑲）、中央下にも一対のプルナ・カラサが見える（⑳）。実際の仏塔入口にも石のプルナ・カラサが置かれていたのではないだろうか。

そして気がついた。以前紹介した東大寺大仏開眼供養の一対の供花もプルナ・カラサなのではないだろうか（㉔）。その時導師を務めたのは来日中のインド僧・菩提僊那（ボーディセーナ）である。彼の指導で器を作りハスの造花を立てて一対のプルナ・カラサができあがる。盧舎那仏の前に置かれ、大仏殿に命を吹き込む。生命を生み出す水が満たされた豊穣の壺から花が咲き散華するイメージだ。

あくまでも私の想像である。

⑰
アショーカ王石柱頭部
（サーンチー博物館）

⑱

⑳

⑲

⑱インド南部アマラーヴァティー出土の装飾石板で実際の仏塔が想像できる。部分拡大するとあちらこちらにプルナ・カラサが（⑲⑳）。
出展：⑱⑲⑳ https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1880-0709-79 （大英博物館の公式サイト）

㉔

㉓

㉒

㉑

供花のルーツを探していて古代インドのプルナ・カラサに行き着いた。それは溢れ出る生命の象徴としての壺でありハスであった。

㉑熱帯睡蓮（エジプトロータス）出展：「花の王国１園芸植物」荒俣宏著／平凡社。㉒サーンチー第２仏塔の玉垣装飾。㉓アマラーヴァティー出土の仏塔装飾石板の部分。出展：https://vmis.in/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati　㉔「東大寺大仏縁起絵巻」大仏開眼供養の供花。出典：https://www.wikiwand.com/ja/ 東大寺盧舎那仏像

桑原専慶流いけばなテキスト696号　2021年6月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

ライラックの季節

＜12頁の花＞　櫻子

花材　ライラック（木犀科）
薔薇（薔薇科）
ユーカリ（フトモモ科）

花器　カットガラスコンポート

待ち遠しいライラックの花が咲く季節。日本では北海道や信州の高原で育ち、ヨーロッパでは街路樹としてもよく植えられている。

甘い香りを持ちハート型の葉とたっぷりとした房咲きに咲く華やかで可愛い花、紫やピンク、白のおしゃれな色。大好きな花。6月だけの限定品。

切り花として届くライラックがもう少し日持ちしてくれれば嬉しいのだが。

出来る限りの水あげをして深水のパンチボウルにいける。きれいなバラと取り合わせた。

ライラックが機嫌を損ねないよう気分良く咲いてもらいたいと願う。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
7月号
No.697

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

檜扇　仙溪

扇のような姿に葉をつけるヒオウギは、古より悪い物を追い払う力があると信じられていた。私の想像だが、身につける厄除けの道具としてヒオウギに似せて作ったのが檜扇なのではないだろうか。お雛様が持たれているヒノキの薄板を綴り合わせたあの扇だ。それまではヒオウギの古名「カラスオウギ」と呼ばれていたのが、それ以後ヒオウギと呼ばれるようになった。（ではないだろうか）

もしそうだとすると、檜扇を元に考案された紙扇や扇子も、植物のヒオウギゆかりのものとなる。人と自然の関わりを感じている。

今年もヒオウギの季節がやってきた。力強く晴れやかな姿に生けたい。

出逢い花（41）

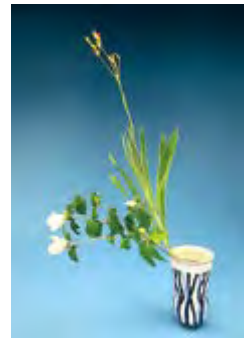
＜2頁の花＞　仙溪

檜扇（菖蒲科）
木槿（葵科）

花器　染付花瓶

鉢植のヒオウギに庭のムクゲを添

えた。染付の花瓶に爽やかに映える。



ヒオウギの生花

〈3頁の花〉　仙溪

花型　生花　行型
花材　檜扇（菖蒲科）
花器　陶水盤

ヒオウギの姿を生かすこと。加える葉はできるだけ少なく自然に。

カジノキの葉

＜4頁の花＞　櫻子

花材　梶の木（桑科）
　　蛍袋（桔梗科）

花器　角形染付花瓶

古代からカジノキは神に捧げる神木として尊ばれて、神社の境内などに多く植えられていた。カジノキの繊維から紙や布を作っていたことから、もとは裁縫の上達を願う行事でもあった七夕に縁が深い。「天の川へ渡る船の梶となって願いが叶えられる」と信じられていた。今日では短冊に願いを書いて笹に結ぶ風習となる。

庭でカジノキを小さな苗木から育てている。夏になり葉が大きくなると複雑な形に変わっていくのが楽しい。伸びた枝を少しだけもらってホタルブクロと飾った。

庭の祇園守り（木槿）とカジの浮かし花

思い出の器

＜5頁の花＞　健一郎

花材　接骨木（忍冬科）

花器　陶扁壺（ティム作）

私たちの結婚の知らせを聞いたマンチェスターの純子さんが企画して下さって、お祝いの品が海を渡って届いた。それは初めて見た器ではなかった。ティムさんの庭の西洋ニワトコ、ススキ、百合でお花を生けたあの器であった。

日本のニワトコをのびのびと生けた。彼の日本的趣向もあいまって良い器だ。

自然の動き

＜6頁の花＞　仙溪

花材　斑入り黄梅（木犀科）
　　クレマチス「エレガフミナ」（金鳳花科）
　　斑入り甘野老（百合科）

花器　鉄枠付赤ガラス花瓶

春に黄色い花を咲かせるオウバイは半蔓性の落葉低木で、ソケイの仲間なので、葉の感じがソケイによく似ている。

明るい斑入りのオウバイを枝姿が生かせるように背の高い花器にいけ、クレマチス・エレガフミナを絡ませた。

どちらも自由な動きがあるので、花が行きたそうな方向に挿してゆく。

偶然生まれる新鮮な美しさ。

斑入りのアマドコロで明るさを加えた。

煙（けむり）の木

＜7頁の花＞　櫻子

花材　煙（けむり）の木（スモークツリー）（漆（うるし）科）
　　カラー5種（里芋（さといも）科）

花器　ガラス鉢

涼しくて陽当たりの良いレストランの中庭に不思議な木があった。近づくとフワフワした雲の中に入り込むような感じ。いい香りがして柔らかく包まれるようだった。

初めてスモークツリーを見たのはドイツだった。ずいぶん昔の事なのでレストランの名前も思いだせないけれど、一緒にいたドイツの友人がドイツ語名で教えてくれた。難しくて聞き取れなかったけれど、意味はカツラの木。ウィッグの事らしいが、日本は煙だし、国によってずいぶん見方が違うのだ。

スモークしてとてもきれいな花となる。カラフルなカラーを集めて夢のような思い出の花に。

『かわいい』

健一郎

家にレモンの友達を迎えることになった。名前はメイと言う。猫アレルギーの菜月といつも一緒にいる。活動的でよく食べる。菜月は言う。かわいいと。千度かわいいと言うので、かわいいを日頃に比べ意識した1ヶ月になった。

グループホームで働いているとその言葉はよく聞く。利用者さんが利用者さんに言う場合もあるが主に職員が利用者さんに対して使う場合が多い。僕がひねくれているのか、このかわいいは、聞こえるたびに癪に触る。

私たちは人間の赤ちゃんだけでなく、幼い動物に対しても、自然と注意がいくそうだ。そういった属性を持つ個体は周囲から攻撃されずに保護を受けやすくなるという利点があるという。そしてその対象に対して、敵意を抱く要素や威圧的な要素がなく、笑顔や丸み、色といった要素を手がかりとしながら、自分との関係性を意識的、無意識的に評価することによって、「かわいい」感情は生まれるそうだ。なるほどと納得をせざるを得ない。それは幼い個体に当てはまりやすいが年齢関係なく条件を満たすと「かわいい」と言う感情は生まれるのだろう。

私の気に触る可愛いについて少し考えてみることにした。原因は職員が利用者さんを守るべき存在として考えることにより得る安心感が影響してでてきた「かわいい」であった。そして他と比較した上での「かわいい」と言う評価だと言うことにも気がついた。幼児扱いする職員も嫌いだし、幼児を幼児として接する人も好きでない。利用者さんでも幼児でもなく○○さんである。一様に接することは正しいのかといつも思う。雑なカテゴライズは個を疎(おろそ)かにする。少なくとも○○さんとは向き合えていない。

グループホームで利用者さんと関わり一年が経った頃から、ふれあいの中で単発的にドキドキすることがあった。それを今はその人の尊さや、存在の輝きに対する私の心の反応だと感じているが、その時は言葉にしようがなかった。今も言葉にできるほど解釈できている気持ちではない。そのドキドキに可愛いと思う気持ちも含まれたのかもしれない。そしてその可愛さはその人が生き生きとすることで発露する。自分の少しの補助が、その人を取り戻す。あるいは新しいその人になる瞬間が好きで日々関わっている。自尊心の回復が生き生きすることと、大きな繋がりを持っている。そしてありのままの自分を認めることができた人は強い。

「みんながこっち見てって言っている目がかわいい。」と僕が勝手に仰(あお)いでいる介護の師匠は言っていた。感度が高い師匠はいつもドキドキしていて忙しそうだ。私はまだ、そこまで感じることはできない。その人が生き生きとした瞬間にしかその気を感じることができない。自己を閉ざした利用者さんは、その人にとって、こちらが安心できる存在になると、「私はここにいるんだよ。」と言う声が聞こえてくる。そしてこれらの話は利用者さんが特別なものでなく、誰に対してもそういった感情を持つことは言うまでもない。

「私な、アホで勉強が出来ひんかったからな、先生の動きとか見て真似したり絵描いたりしててん。今も人にはすごい興味があって、カフェとかに座って1時間でも2時間でも街見てにやけてんねん」と話を師匠から聞いたとき、感度の高さに愕然とした。生粋の観察者である。師匠ほど介護の仕事が似合う人はいないだろう。私はその観察眼が欲しい。

かわいいという比較可能な次元を超えて絶対的な存在になるということ。それは各個人の問題かと思っていたが、見る人の感度次第なのだと今は考えている。ドキドキしている時間が一秒でも増えるように観察のスキルを磨くしかない。あるのだから見えるはずだ。

レモンとメイ

くれない

健一郎

花材　土佐水木（満作科）
　　紫陽花「紅」（紫陽花科）
花器　陶鉢（フランス）
（いけばなプレゼンテーション出品作　写真①）

トサミズキにアジサイ。季節の勢いある花を勢いのままに生けた。白からだんだん色づいていく紅というヤマアジサイだが上品な紅色が好みだ。花展の花はやはり気持ちが良い。

いけばなプレゼンテーション会場風景（京都芸術センター）

レモンちゃん「なんの葉かにゃ？」

夏に実を生ける

＜表紙の花＞　健一郎

花材　オクロレウカ（菖蒲科）
　　実と葉
　　透かし百合（百合科）
花器　方形陶コンポート

オクロレウカの実と赤黒のスカシユリの2種で生けた。夏らしい花になった。生けてみるとオクロレウカの実の重さに気づく。古い葉から黄色くなり、若い葉はまだ緑を保っている。

黄色くなった葉は少し倒れ、実が浮き出てくる。背景の色、器ともに強い色を選んだが個人的には納得いく作品に仕上がった。

プルナ・カラサの今と昔

仙溪

花と器の図像を探るうちに古代インドのプルナ・カラサ（満瓶）にたどり着いたが、それは「豊かさと溢れる生命力」を象徴していた。

そのイメージは、私達が器に花をいけた時に「命の輝き」「生命の神秘」のようなものを感じることと、深いところで繋がっているように思う。

手にした花を生かそうと無心になって生けることは、インド哲学的に言えば「小宇宙（個人）と大宇宙（宇宙）の関係」を体感し、それを形にしているとも言い換えられる。

インドでは今もプルナ・カラサは大切なアイテムだ。古典的なインド芸術の8つの縁起の良いシンボルの1つであり、人生の充足と繁栄を象徴している。ヒンドゥー教の家庭では伝統的に儀式や結婚、出産に関連する祭典において崇拝の対象となっている。

ただし、壺から生え出るハスではなく、水を入れた壺にマンゴーの葉を入れ、その上にココナッツが置かれ、花の供物がトッピングされる（図①②）。

壺は地球、子宮、個人、信者の心にたとえられ、水は生命を生み出す創造的な力と見なされ、マンゴーの葉は愛の神カーマを表す豊かさの象徴であり、ときには五感を表す。換金作物のココナッツは繁栄と豊かさ、深い意味では神の頭または意識を象徴する。その固い殻は人に寛容さを与え、成功を達成するために一生懸命働くように促す。ココナッツはまた、寺院の神の前で砕かれ、魂がエゴの殻から抜け出すことを意味しているそうだ。

プルナカラサは、ヒンドゥー教の神話の5つの原始的な要素とも関連付けられる。壺の広い下部は「地」、広がった中央部は「水」、上部または首は「火」、口は「風」を表し、ココナッツとマンゴーの葉は「虚空」を表している。

プルナ・カラサによって人は世界と繋がり、条件付きの存在から解放される。

（参考：「The Conceptual, Cultural and Artistic Significance of Purna-Kalasa and its Use in Hindu and Muslim Architecture of the Subcontinent」Naela Aamir（University of the Punjab, Lahore, Pakistan.））

古代インドの研究者、アグラワラ博士の「プルナ・カラサ」に関する書物（図③）には次のように書かれていた。

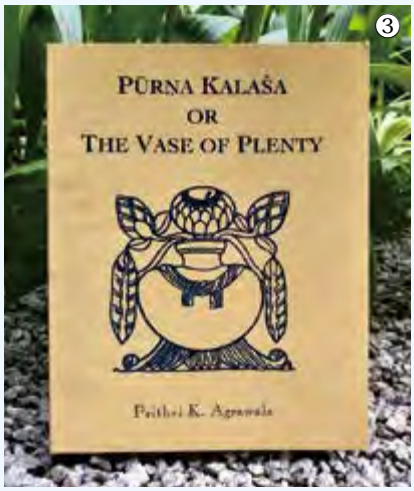
「プルナ・カラサは最も初期の時代から神秘的な生命力の目に見える象徴として、また美と縁起の良い装飾的なモチーフとして人気があり、インド文明の時代を通して存在してきた。」

「崇拝や儀式において神またはゲストにプルナ・カラサを提供するというインドの普遍的な慣習がある。」

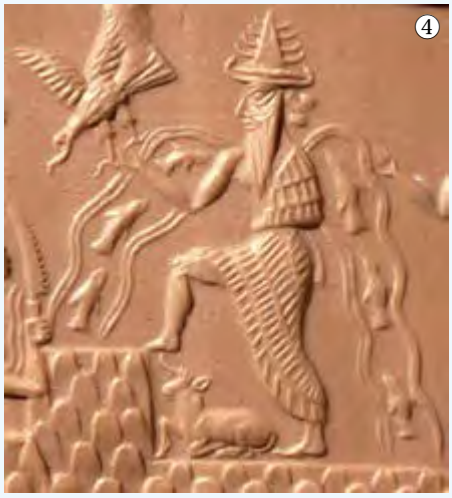
古い時代の叙事詩に、王妃が通る道を金や銀の壺にハスを挿して飾ったという記述もあるそうだ。

そしてこの本の巻末には補足として、プルナ・カラサの起源を考える上で、

現在のプルナ・カラサ。ヒンドゥーの祭典で重要な意味を持つ。出展　図①：https://www.wordz.com/kalash/。図②：https://www.nithyananda.org/photo-gallery/nithyananda-diary-7th-august-2013-photos#gsc.tab=0



「Purna Kalasa or The Vase of Plenty」
Prithvi K. Agrawala 著。



肩から川を出す神「エンキ」が山に足をかけている。円筒印章の印影。前2300年。大英博物館。
出展：図④⑤⑥ https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1891-0509-2553

メソポタミアの「水が溢れ出る壺」が紹介されていた（図⑩）。「グデアのビーカー」と書かれている。

グデアは紀元前22世紀頃、アッカド王国滅亡後のメソポタミア南部ラガシュの支配者で、神に祈るグデア自身の石像が多く見つかっている。その中に水が溢れ出る壺を持ったものもあるのだが（図⑪⑫）、そもそもこの水の表現はシュメール神話に登場する水の神「エンキ」の図像に見られる。

紀元前23世紀の円筒印章（円筒形のハンコ）に、肩から川が湧き出るエンキの姿が彫られている（図④⑤⑥⑦）。

「エンキ」には「地の王」という意味があるそうで、あらゆる生命の源と解釈すると、インドにおけるプルナ・カラサとの繋がりも感じられる。

太古からの清烈な水の流れ。人は水に豊かな生命力の源を感じとり、壺と花の造形を生んだ。過去に自然と人の関係から様々な美が創造されてきた。いけばなもその一つなのだと思う。

※このページの図は古い時代から順番に掲載しています。

円筒印章 ⑤

印影 ⑥

円筒印章（シリンダー・シール）は円筒形の石の表面に図像を彫り、粘土板に回転させて押印する。「Adda」の印章。左から狩猟神、イシュタル、太陽神、エンキ、ウシム。高さ 3.9cm。前 2300 年。シッパル (?)。大英博物館。

エンキが王座に座り、肩から流れ出る川に魚が見える。高さ 3.9cm。前 2250 年。大英博物館。
出展：https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1911-0408-7

「アッカド王シャル・カリ・シャリ」の印影。2 人の英雄が水が湧き出る壺を持つ。スイギュウのいるインダスと、メソポタミアが交流していたことが読みとれる。高さ 3.9cm。前 2217 ～ 2193 年。ルーヴル美術館。出展：https://collections.louvre.fr/ark:/53355/cl010147030

ひざまずく 4 人の英雄。うち 1 人の頭に水が湧き出る壺が見られる。前 2220 ～ 2159 年。アッカド、メソポタミア。高さ 2.8 cm。メトロポリタン美術館。出展：https://smarthistory.org/cylinder-seals/

⑪ ラガシュの王子グデア。農業の女神ゲシュティンアンナに捧げるための、水が湧き出る壺を持つ。前 2120 年頃。ルーブル美術館。⑫ 水の流れに魚が見える。
出展：図⑪⑫ https://collections.louvre.fr/en/recherche?q=Gudea

無限の水が流れ出る壺を示す石灰岩の記念碑の一部。グデアの時代。大英博物館。出展：https://www.britishmuseum.org/collection/search?agent=Gudea
この図像はグデア以前、アッカド王国時代から見られる（図⑧⑨）

桑原専慶流いけばなテキスト697号　2021年7月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

ボッグウッド　仙溪

花材　芭蕉の枯葉（芭蕉科）
エンシクリア・アデノカウラ（蘭科）
アロエ「不夜城」（アロエ科・ユリ科）
ボッグウッド

花器　陶花器（篠原雅士作）

アイルランドの泥炭層に埋もれていたオークの木片「ボッグウッド（埋もれ木）」。長い年月をかけて自然がつくった色艶には深い魅力がある。

華道創心流家元の作られる黒釉掛け流しの花器がこの木片に合うと思った。器にのせると木片が生き生きしだす。芭蕉の枯葉も違和感がない。あとは個性的な蘭の花があれば充分だ。蘭に葉が無かったので小さなアロエを覗かせた。

（いけばなプレゼンテーション出品作）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
8 月号
No. 698

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

染付花瓶

＜2頁の花＞　仙溪

花材　丸葉の木（満作科）
　　唐糸草（薔薇科）
　　瑠璃虎の尾
　　（胡麻の葉草科）

花器　染付花瓶

「染付」は、白色の胎土で成形した素地の上に酸化コバルトを主とした絵の具で模様を絵付けし、その上に透明釉をかけて高温焼成した陶磁器のことで、おもに磁器で、模様は藍青色に発色する。この絵の具の材料を呉須と呼ぶ。江戸時代初期に中国から日本の伊万里に伝わった。

　染付の器には写実的な絵柄もあるが、花をいけるには自由奔放な筆致の模様の方がいい。素早い絵付けの闊達さが、いけた花の瑞々しさをより増してくれるように思う。

　薄紅色と瑠璃色の夏草に、大らかな丸い葉とどっしりした染付の器が涼感を加えてくれた。

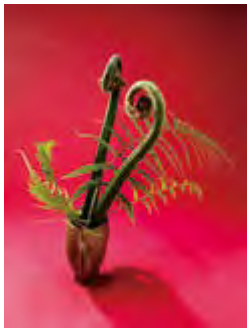
3億年のつきあい

＜3頁の花＞ 健一郎

花材　ヘゴゼンマイ（ヘゴ科）
　　姫羊歯（ひめしだ）（姫羊歯科）
花器　耳付陶花器

湿気のある場所を好むシダ。夏になり花が減ると緑に目がいく。艶やかでその場で生き生きとしている。京都市内でいえば三室戸（みむろど）寺のシダが特別綺麗だった。紫陽花（あじさい）と石楠花（しゃくなげ）で有名なお寺であるがシダがとても印象に残っている。スマートフォンの待受にしてしばらく楽しんでいた。

今回シダと取り合わせたのはヘゴゼンマイ。やはりシダとの相性は抜群である。約3億年ほど前に全盛を迎え、その時以来の仲である。時代の括りとしては古世代石炭紀とされているがこれは、大量に生息したシダ類が石炭となりヒトの産業革命のきっかけになった事が由来している。プリミティブな器が原始的な空気をより強調してくれる。



テッポウユリ

＜4頁の花＞　仙溪

花材　木苺（薔薇科）
　　鈴薔薇の実（薔薇科）
　　鉄砲百合（百合科）
花器　焼締陶花瓶

毎年、ユリの品種改良がおこなわれていて、新しい品種に出会う楽しみがあるのは有り難いことだが、昔から親しんできた品種が栽培されなくなってしまうのは淋しいことだ。ササユリや関西のタメトモユリのように栽培が難しいものに加えて、カノコユリもほとんど見なくなってきた。カノコユリは俯く姿が敬遠されたのかもしれないが。

そんな中でもテッポウユリが現役で頑張ってくれているのは嬉しい。ユリと言えばテッポウユリなのだ。強くて美しいテッポウユリを今後もずっといけ続けたい。

コエビソウ

＜5頁の花＞　健一郎

花材　エンシクリア・セラタン（蘭科）
小海老草（狐の孫科）

花器　陶花瓶（前田保則作）

コエビソウはメキシコ原産のキツネノマゴ科の植物である。茶花にも使われることがあるそうだ。小海老草と呼ぶのでは印象が大きく変わる。一緒に取り合わせたのは、エンシクリア・セラタンというオンシジュームである。コエビソウと呼ばれるように綺麗にグラデーションした甲殻に目がいくがよくみると可憐な花を咲かせる。エンシクリア・セラタンと模様がそっくりだ。

横から見た奥行

夏の立花

＜6頁の花＞　仙溪

花型　除真立花
花材　夏櫨（躑躅科）
　　笹百合（百合科）
　　檜扇（菖蒲科）
　　紫蘭（蘭科）
　　桔梗（桔梗科）
　　日向水木（満作科）
　　玉川杜鵑草（百合科）
　　河原撫子（撫子科）
　　紫陽花（紫陽花科）
花器　焼締陶花瓶

稽古の見本に立てた立花が10日経っても元気なので、胴・流枝・控枝・前置をいけかえて写真に撮った（7月7日撮影）。

多くの木や草花が一つの器におさまって、なんともいえない風情が作られる。立花は実に不思議ないけばなだ。これからも植物たちによる調和の美を楽しみたい。

セフリジと
アンスリウムの生花

〈7頁の花〉　健一郎

花型　株分け生花
花材　セフリジ（椰子科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　陶水盤

メキシコ原産のセフリジ、別名竹ヤシとも呼ばれている。節が竹と似ており、面白い植物だった。違和感なくお互いの個性が発揮できている。生花としていけると盛花や投げ入れでは見つけられなかった姿が見つかる。アンスリウムとセフリジのいい表情をみる事ができた。

横から見た奥行

『山登り』

健一郎

花は足で生ける。気に入っている言葉だ。街中に住んでいるのもあり季節の植物とは距離がある。私は特定の植物を大切に栽培されている神社やお寺をよく訪ねる。二、三日あれば日本ならある程度のところにまで行くことができる。最近は季節に合わせて山を選びそこでしか会えない植物の生息する場所まで訪ねている。

山に登ることはあまり好きでない。だが山にいるのは好きだ。山で見る植物も好きだ。4人で尾瀬に水芭蕉を見に行った時のことだが、急勾配な場所では家元が副家元の荷物を持ち登っていた。山登り自体を楽しんでいそうに見えたのは家元ぐらいである。「六月やのに桜が咲いてる!」「これはムシカリ?オカメノキかな?」みんなで山に生息する植物を見ながら登ると身体のしんどさはあまり気にならなかった。

私の山登りは花見の感覚に近いのかもしれない。会いたい植物に出会うための道である。登る回数が増えると、山に何かを感じる事が増えていき、山に対する信仰にも興味が出てきた。古くから信仰されている山や、面白い言い伝えのある土地には、何かがある気がしてならない。火のないところに煙は立たないというが、面白い伝承がある場所には何かがある。何かを感じ取る力が少しはついてきた気がする。

キリスト教文化圏では山や森は魔女、悪魔の住む忌むべき土地として切り開かれてきた。人が増えることで必要な土地も増えたのだと予想する。初めての山に入る時の気持ちはどのようなものであっただろう。私はキリスト文化圏の見せた反応は分からない怖さに対して素直な反応だと思った。だが全てを光の元に晒してしまうと未知の部分がなくなり、奥行きがなくなってしまうのではないかと私は思う。

海外のヒマラヤアルプスのような山脈とは異なり、日本の山は人里に近く、身近な存在である。豊かな水系を育み、人里に壊滅的な災害をもたらすこともある。人は山に対して畏怖し、信仰するようになったのではないだろうか。私はその場にいればしてしまうだろうと想像している。古代において、死後に人の魂は高いところにいくと考えられていたそうだ。山への信仰がそうさせたのか、魂が高いところに行く考えが先かは知らない。先祖は山へと還っていき、山から見守ってくれている。お正月やお盆などには、子孫たちと交流するために山から降りてくるという感覚は今にまで伝わる。

この間、三輪山の大神神社に訪れた。神を祀る本殿がなく、山そのものを拝む形になってる。三ツ鳥居をみることは叶わなかったが、いい空気を吸うことができた。人が創作した神と比べると原始的で自然な信仰だと感じた。中でも印象的だったのは太陽と空と山である。なんの飾り気もなく只々そこにあった。それがいい。昔は笹ゆりが自生し周辺にたくさん咲いていたらしく、それは、それは神秘的であっただろう。

お寺や教会などの宗教施設に入ると非現実的で、不思議な気持ちにさせられる。どれだけ現実から離れたかったのだろう。祈りや願いが複雑に絡み合っている。そして宗教施設が教えを厳かなものにする。その作用を人工物ではない、山や自然が担っているという事に対して興味がわいた。

日本独特の山に籠って厳しい修行をする修験者や山伏は、特異な自然環境の場に目をつけ、そこにふさわしい修行や儀礼を創出する。例えば、断崖の「覗き」は有名である。

森林限界を神仏の地と意味づけ、それらが精神的高揚をかきたてる。バンジージャンプの起源とされているバヌアツという国のナゴールと呼ばれる儀式は成人の儀式として有名である。自分の足に巻きつけるツタを自分で探し、自分達で組んだ30メートルの高さの櫓から飛び降りるというものである。私はこういった儀式や修行が好きであるが、嫌いな人がいることも承知している。

ある本で行者さんが以下のことを述べていた。

「行者は、精神異常と同じ。寒中の水が冷たいのも、火渡りの火傷が熱いのも知っているが、冷たい水をかぶり火の上を歩く。それを分かってやるのだ。まともな人なら正常な判断が冷静にできるからしない。行者はおおむね狂っている。」

私は自然に身体を預けることが、自然に少しでも近づくことができているのが嬉しくて、どこにでも飛び込んでいる。その度に言葉には、し難い経験をしてきた。それが霊感かと聞かれればそれは分からない。だが特別な体験であることは確かだ。これからも植物を求めたい好奇心と、もっと身体を自然に溶かしたいという欲求がある。

私は、自分なりの方法で自然と向き合いたいと思っている。さまざまな宗教が持つ形式化されたものは時代を追うごとに洗練されているとは思っているが、僕にはその原初や、初めの心を読み取る力がない。自分なりの方法で向き合おうと思う。滝に打たれたり、スカイダイビングや上半身裸でスノーボード。今箇条書きにしてみたが挙げだすとキリがなかった。

衝動的に身体を動かしたくなったものや、前もって準備が必要なものがある。中には行者の始まりの時代には体験できないようなものまである。今の時代にあった今の自然と向き合うことは私たちしかできない。流祖が昔を知り、今を知り、生み出した。そして今までの家元達はその生きる時代を知り、それぞれが生み出した。私は今五感を解放し今を知ろうとしている。とは言っても興味があってしたいことをして、毎日遊んでばかりなので頑張ってはいない。

縞すすき

＜表紙の花＞　櫻子

花材　縞薄（稲科）
　　アンスリウム数種
　　（里芋科）

花器　白磁扁平花器

縦ジマがはいるススキは縞薄。横ジマがはいるのは鷹の羽薄。

久しぶりにシマススキを見つけたので、アンスリウムを足元に固めてみた。

タカノハススキなら竹籠などに夏の草花と一緒にいけたいと思うが、シマススキは強靭な雰囲気なので洋花との取り合わせもいいかもしれない。

力強く立ちあがる葉もあり夏の夕立ちのよう。

今年の夏も無事乗り越えられますように。そんな事を願いながら少しでも長持ちしてくれるよう毎日水替えをしている。

横から見た奥行

京の花物語・檜扇展示会　京都

会期　第4期
　　7月23日(金)～25日(日)

会場　祇園祭ぎゃらりぃ
　　漢字ミュージアム1階

出品　桑原仙溪

花型　除真立花

花材　梅花躑躅（躑躅科）
　　檜扇（菖蒲科）
　　朝鮮槙（犬榧科）
　　仙翁（撫子科）
　　桔梗2種（桔梗科）
　　女郎花（女郎花科）
　　紫陽花「紅」（紫陽花科）
　　小葉の髄菜（髄菜科）
　　鳴子百合（百合科）

京都府花き振興ネットワークによる宮津産ヒオウギのPRイベントに、京都いけばな協会が協力して毎年7月の週末に2流派ずつがヒオウギのいけばなを展示している。各先生方の花とインタビューが後日数分のPR動画になって公開予定。

レモンちゃんとノカンゾウ。今年も咲くかな。（昨年8月撮影）

日本に来た満瓶　プルナ・カラサ

仙溪

これまで壺から蓮が生え出る図像「プルナ・カラサ（満瓶）」が古代のインドで生まれたことを見て来た。壺に満たされた水は生命の源であり、生え出るハスは力強い生命の象徴であった。

インド、中国、朝鮮、日本と仏教が伝わる中で、満瓶はどうなったのだろう。

仏教が伝わって150年頃の日本に、ハスが生え出る壺の図が存在していた。奈良国立博物館所蔵の国宝「刺繍釈迦如来説法図」（図③）に満瓶に似た図像をみつけた。（図①）。

丸い壺の口にハスの花と葉が見える。壺の飾りもインドのプルナ・カラサに似ている。今まさにハスが生まれ出たという感じがする。刺繍で表現されているのだが、7～8世紀頃の中国仏教に関わりを持ち、日本に伝わったもののようだ。

とても高度な刺繍による仏画（繍仏または繍帳と呼ばれる）で、いつ何処で誰が作らせたのかの記録はない。

樹の下で腰掛ける赤い衣の如来が大きく描かれ、左右に菩薩たち、その上に奏楽天人たち、下方には俗人や比丘（仏教僧）が居並ぶ中で、中央に後ろ向きの女性が立っている。この図の解釈や製作地（日本か中国か）には様々な説があるようで、どの説が正しいのか分からないが、中国史上唯一の女帝である武則天（則天武后）が宮廷工房で作らせたとする大西磨希子氏（仏教大学教授）の説が興味深い。

武則天は690年に皇帝の座につく時、女帝出現を予言した経典があることを理由に自分の正当性を誇示したとされている。その時10人の沙門（仏教僧）の協力を得た記録があり、この図像と一致する。自分が理想的統治者であるというイメージを打ち出すために作らせた繍仏だとするのが大西氏の説だ。702年に日本から遣唐使が長安を訪れ、武則天に拝謁した折に賜ったものと推定しておられる。他の説と比べてみて、一番説得力があるように思う。

後ろ向きの女性のとなりに、花が盛られた水盤（供花）を捧げ持つ僧がいる。武則天（後ろ向きの女性）は中央の弥勒仏（大西説による）に向かい、ハスの生え出る壺を右手に持っている。壺は青いガラス製だろうか。こちらは供花というよりも、清らかな水を弥勒仏に捧げている（もしくは授かった）ような感じだ。命を生み育む、生命の源としての水が、このドラマチックな場面に命を吹き込んでいるかのようだ。

よく似た図像が2～3世紀のインド仏教遺跡から見つかっている（図⑥）。神々がハスの生えた丸い壺を持ち、そこから天界の神聖な水を仏陀の居場所にそそぎ、祝福している。ここではハスの生えた壺は天界の清浄な水を表しているのだろう。

絵の解釈はともあれ、飛鳥時代末期の日本に、プルナ・カラサ（満瓶）に似た図像が存在したのだ。ハスの生える壺の図像は、当時の日本人に何かをもたらしたはずである。

国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。
赤い紐飾りのある丸いガラス（？）の壺から、ハスの花と葉が出ている。いけばな的に見ると、水際立ったシンプルな生花（せいか）のようにも見える。

国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。
後ろ向きの女性（大西説では武則天）がハスの生え出るガラス（？）の壺を釈迦如来（大西説では弥勒仏）に捧げ持っている。その上に植物が生い茂る池のようなものがあるが天界の泉か。手に持つ壺と関連があるのだろうか。

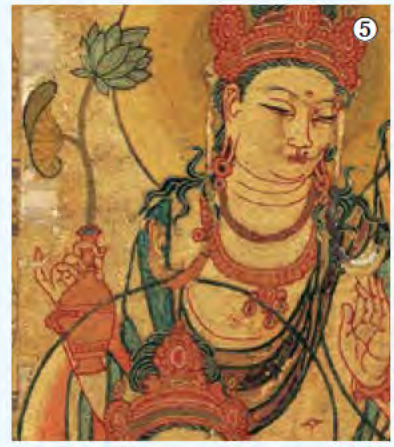
③

国宝「刺繍釈迦如来説法図」。京都・勧修寺（かじゅうじ）に伝えられ、「勧修寺繍帳（繍仏）」の名でも呼ばれる。縦207・横157cm。8世紀。奈良国立博物館。
出展①②③④⑤：https://www.narahaku.go.jp/collection/647-0.html

中央の釈迦如来（大西説では弥勒仏）を囲うように上から六仙人、十二奏楽天人、十四菩薩、十比丘、十二供養者が描かれている。大西説では弥勒菩薩が弥勒如来となって兜率天から現れるという下生信仰にかけて、現世を救う弥勒仏に自分をかさねた武則天の強い意図があったとされている。
座の背には壺の装飾が見える（図④）。天界の浄水が満ちている?。

④

〈情報〉
奈良国立博物館・特別展「奈良博三昧、至高の仏教美術コレクション」前期展～8月15日に国宝「刺繍釈迦如来説法図」が出品されています。すべての作品が写真撮影可能だそうです。



⑤

国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。菩薩の一人がハスが挿された水瓶（浄瓶）を持つ。花による供養を表すものか。唐時代の中国で、実際にこのような瓶花がいけられることもあったのだろうか。

【参考】
「奈良国立博物館所蔵　刺繍釈迦如来説法図の主題
―則天武后期の仏教美術―」大西磨希子
『仏教史学研究57巻』（仏教史学会）２０１５年3月

⑥

インド、アマラーヴァティー出土の石板。2～3世紀。「菩提樹の崇拝」神々がハスの花が咲く壺を持ち、聖なる木に天界の神聖な水を注いでいる。菩提樹＝仏陀を祝福するとともに、清浄な場所であることを表現しているのだろう。クリーブランド美術館。
出展⑥：https://vmis.jp/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati

桑原専慶流いけばなテキスト698号　2021年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

お稽古の花

＜12頁の花＞　健一郎

花材　京鹿の子（薔薇科）
桔梗2種（桔梗科）
女郎花（女郎花科）
瑠璃虎の尾（胡麻の葉草科）
鳴子百合（百合科）

花器　手付竹籠（公長斎小菅）

私のお稽古では年に数回は籠を使っている。桔梗と京鹿の子の数を増やしてテキスト用の花とした。今回高台寺の「おりおり」さんから頂いた籠のおとしがガラスで驚いた。撮影してみると宙に浮いているよう。モダンで夏らしく涼しげに入った。少しボリュームが過ぎる風にも見えるが賑やかで感じが良い。

横から見た奥行

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
9月号
No.699

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

暑さに別れを

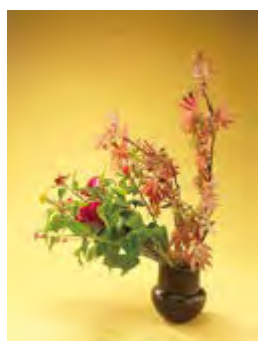
＜2頁の花＞　櫻子

花材　七竈（薔薇科）
　　鶏頭（莧科）

花器　陶花器（前田保則作）

ナナカマドは北国に多く、ケイトウは南国由来の花だ。それなのにナナカマドの紅葉にはケイトウの秋色がしっくりとよく似合うのが不思議。ケイトウの瑞々しい緑の葉が両者を繋ぐ役目をしてくれている。

ケイトウを前へ出したので、ナナカマドを後ろに高く立てた。



山芍薬の葉

＜3頁の花＞　健一郎

花材　山芍薬（牡丹科）
　　支那油桐（燈台草科）

花器　鳥耳銅花器

山芍薬は葉を魅せるのが難しい。

一輪だけならまだしも何かの花と取り合わせたり、もう一輪入れると葉の美しさが失われてしまう。ひと節ごとに曲がりやなんとも言い難い葉と葉の空間、そして綺麗な葉を魅せたかった。格好良く写っている。垂れる支那油桐の若い実が葉を引き立て、上に伸びる葉が実の魅力を助長している。

新入りのメイちゃんは、日光東照宮の「眠り猫」にそっくり。

菊の盛花

＜4頁の花＞　仙溪

花材　糸菊（いとぎく）2種（菊科）
　　スプレー菊2種（菊科）
花器　梅花皮釉（かいらぎゆう）陶水盤
　　（木村盛伸作）

「立花時勢粧（りっかじせいしょう）」には菊一色の絵図が3点ある。「大中小の品種を彩りよく花形風流に指す」のを理想とするが難しいものだと書かれている。（テキスト672）

「立花時勢粧」よりかなり前の「文阿弥（もんあみ）花伝書」には「菊ばかりは立てず」と書かれている。何年の隔たりがあるのか分からないが、流祖の時代には園芸文化の発展と共に、菊ばかりで立てることが可能なくらい多くの品種があったと想像できる。

今はさらに外国生まれの菊も加わり色も形も様々だが、糸菊の繊細さを生かすには優しい雰囲気の菊を合わせるべきである。

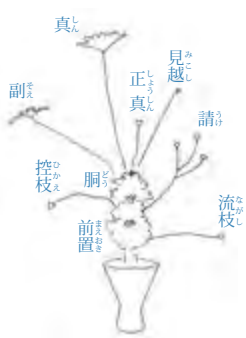
菊一色の立花

＜5頁の花＞ 仙溪

花型　菊一色　除真立花
花材　糸菊（菊科）
　　スプレー菊（菊科）
　　小菊（菊科）
　　寒菊（菊科）
花器　陶花器

横倒しに育った菊が無い時は、作例のようなスプレー菊の小枝を整理するなど工夫すれば、自然な感じに立てることができる。

茎を撓めたところはフローラルテープを巻いて乾燥を防ぎ、葉を長持ちさせたい。



横から見た奥行

除真立花２作

花型　除真立花
花材　七竈（薔薇科）
　　木苺（薔薇科）
　　朝鮮槙（犬槲科）
　　鶏頭（莧科）
　　狗尾草（稲科）
　　女郎花（女郎花科）
　　竜胆２種（竜胆科）
　　小菊（菊科）
　　鼈甲柾木（錦木科）　６頁
　　桔梗白花（桔梗科）　７頁
花器　陶花器

＜６頁の花＞　　仙溪

稽古で立てた立花。同じ花材で健一郎が立てた立花と比べると自分の生真面目さがよく分かる。

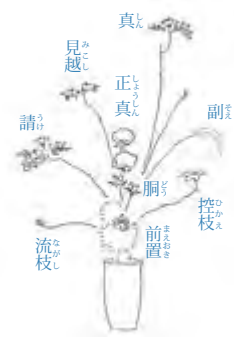
真に深山の木ものを使っているので、見越には山の梢を感じるような花材を選ぶべきだった。「見越」については「テキスト６２９」を参照ください。

＜７頁の花＞　　健一郎

今回は七竈の紅葉があまりにも綺麗だったので真にした。厚みのある真を軸に周りの役えだをこさえていった。鶏頭を正真へと考えたが色が七竈の色と似通っているので白の竜胆を正真にした。全体

のバランスを見るともう一本足したいところである。課題は山ほどあるが一つずつ向き合っていきたい。

〈7頁の花〉



〈6頁の花〉

〈7頁の花〉

〈6頁の花〉

横から見た奥行

ギンギツネ

＜表紙の花＞　仙溪

花材　葉鶏頭（はけいとう）2種（苋（ひゆ）科）
　　銀狐（ぎんぎつね）の枯花（稲科）
　　スモークグラス（稲科）

花器　陶花器

白い尻尾（しっぽ）のような穂。花屋に来た時は緑色だったのが、いつの間にか白くなったそうだ。ギンギツネの名前がついていた。調べるとアフリカ原産のペニセタム・ヴィロサムという品種で、花穂が20センチ以上になりキツネの尾のようなので日本ではギンギツネと呼ばれている。作例の花穂は10センチ前後だが、一目見て枯れ色に心を奪われた。

同じイネ科のスモーク・グラスを合わせ、小型のハゲイトウを加えた。枯れ色の不思議な美しさが表現できたのではと思う。

『東北旅行』

健一郎

マグカップのように実用的なものを作るためにはどうすれば使いやすくなるか考えればいい。手に馴染むもの、形の格好良さを気にするのである。実用から離れたものを制作することはさらに難しいと考えている。それは作品である。これほど曖昧で評価のしにくいものがあるだろうか。

土を使った作品は生け花と違い、無から有を作り出すものかと思っていたが、土があることに気がついた。大きな発見である。無ではなく無限であった。いかにして作品になりうるのだろう。

土と向き合うことで形が出てくるのだろうか。とても繊細な観察眼で土の表情を見る必要があると思われる。そして気の遠くなるほどの実験が不可欠だ。僕が尊敬している陶芸家の作品を見ているとその登り窯の不確実性と土地の土と格闘しているように見えた。

生け花は生命に命を吹き込む。陶芸は形を作り命を吹き込む。共通しているのは、花、土を生き生きとさせられるかである。そしてこれが命を吹き込む者の技量である。

登り窯の火入れ式に初めて参列した。今回の窯の成功と安全を火の神様に祈願する。火に対する特別な感情が増幅される空間だった。自分で作った器は入っていないので、想像でしか無いが、窯入れするとき自分の作品は自分の元を離れて火の神様に委ねる感覚なのだろうか。面白い。

そしてこの日から三日間火を絶やさぬよう交代で温度を見ながら薪を焚べていく。そして急な温度の変化で土が割れないように三日ほど窯を休めてから窯出しをする。緊張の瞬間である。窯の中で放り込んだ薪が当たって、形の崩れていた作品が一つだけあった。良い表情をしている。登り窯は電気窯に比べ制御が効かず安定感に欠ける。つまり味を出してくれるわけだ。苦い味であることが大半であるらしいが、時折とびきりの作品が出てくる。

前回は窯を休めている間に1人で松島、遠野、花巻、十和田湖、奥入瀬、等々を巡っていた。1人だと気楽なものであったが、今回は菜月との旅である。食べるご飯にも気を使い、宿も綺麗なところでないといけない。2人で車を借りてゆっくりと各地を周った。

奥入瀬（おいらせ）渓流周辺のブナの森林は特別気持ちが良かった。人工的に作られた杉林は例外であるが、自然の群生地ではその植物が気持ちよさそうにしているように思う。他の場所に比べ、他の植物が少ないからか、競争をしているように見えない。のびのびとしている。これ（写真⑦）は菜月が撮った写

①火入れ式後の日。丸３日間燃え続ける。
②デモンストレーションの花『不忘』のお軸と。
③不忘庵にてのデモンストレーションの様子。

真なのだが良く撮れていて、その場の空気が伝わりそうである。気持ちよさそうだ。ブナ林に足を少し踏み入れるとそこには誰もおらず、人がこれ以上ここにいてはいけない気さえした。神聖で不可侵な雰囲気を味わったのは久しぶりだった。本物をみた。ブナの森林へは道路があったので立ち入ることができたが、道路すらなかった方が良かったのかも知れないと思わされた。人がここまで本当に立ち入るべきであったのか。道路があるからここまでこれた事実を受け止めることができなかった。

「あーーーー」車でガタガタした砂利道を走るときは2人のお決まりだ。一定の声を出しながら車の振動で音が変わるのを楽しんでいる。奥入瀬ほどまだ観光地化されていないのか道路が整備されていない。青森の市内から2時間ほどで白神山地についた。ブナももちろん綺麗だったが池が印象的であった。なぜこんなにも青いのか。一説によると純粋な水の色であるからだそうだ。泳ぐことは叶わなかったが空気を吸って目で堪能した。（写真⑥）

伊豆沼（いずぬま）の蓮（はす）には驚いた。何周首を回しても一面に蓮が広がっていた。写真（⑧）を見てもわかるように蓮と山と空で画面が三つに分割されている。一切のノイズが、かき消されている。387ヘクタールびっしりと蓮で埋め尽くされていた。甲子園球場の約100倍、京都御苑の約4個半の広さである。

立ち枯れがまじるアオモリトドマツの群生。（蔵王）

ブナ林（奥入瀬付近）

沸壺の池

奥入瀬渓流

伊豆沼の蓮まつり

古い蓮のようで食用ではないらしい。観賞用の蓮だそうだ。その中を遊覧船に乗って蓮の花に浸る。写真が悪く、言葉にもし難い。蓮が好きな人には一度は見てほしい光景であった。極楽浄土には行ったことがないが、こんなところなのだろうか。蓮を観念的に捉えている人からすると浄土のような風景に見えるに違いない。私個人の感想としては、蓮の圧倒的な雰囲気と数にのみ込まれ溺れたような気がした。

道を歩いていると東北の季節にも関心が向いた。七竈の葉は色づき始め、ムクゲの下に紫陽花が綺麗に咲いていた。季節に幅がある。京都の一点に住んでいると季節と季節がグラデーションしているのがはっきりとしている。その常識を持って東北を歩くと違いにはっきりと目がいく。旬に幅があるということは、季節を表現する花も、異なってくる。こればかりは東北で生活をしてみないとわからないことだが。僕が発信している世界中から寄せ集められた花を使って生ける花に旬はあるのだろうか。無いはずの旬を作る作業をしている時もあるのでは無いかと思う。季節にズレがある事を頭で知ってはいたが、実際に目の当たりにすると納得する。季節の表現に幅ができた。今を知ることで今を生けることができる。今花を生けることは今を知ることから始まる。私は現在、生けている花のことはもちろん、その環境にも強い関心があるらしい。

チョウノスケソウ

マツモトセンノウ

コマクサ

ネジバナ

キョウカノコ

ヒメルリトラノオ

エビネラン

ムクゲとアジサイ

ギボウシ

岩手県の安比や、宮城の蔵王、八甲田山など標高の高い場所に訪れる機会が多く、背の低い可愛らしい花にたくさん出逢った。

桑原専慶流いけばなテキスト699号　2021年9月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

ヒヨドリと柿

<12頁の花>　健一郎

花材　柿（柿科）
　　ダリア「黒蝶（こくちょう）」（菊科）
花器　陶花器

数年前、日本の神様が生まれた土地の空気を吸いに、菜月と高千穂の神社を巡っている道中だった。大きな葉が数枚しか残っていない柿の木に20羽くらいヒヨドリが群がっているのをみつけた。確かカラスも混じっていた。一羽でさえ賑やかな鳥なのに。人は僕ら以外におらず、その場は柿とヒヨドリに支配されていた。忘れられない光景である。花屋でこの枝（前年の実）を見かけた時、ふとその光景が浮かんだ。柿に黒蝶のダリアを合わせた。柿にほとんど葉がないのでダリアの葉が身に染み入るようである。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
10月号
No.700

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

花守として

櫻子

盧山寺源氏庭の東側には古くから桑原専慶流記念塔が建てられている。

楓の木と楠の木陰でいつもしっとりと苔生す姿で私を迎えてくれる大きな石碑だ。

師範認証式や行事がある時にはこの記念塔に献花するのは私の役割で、若い時からずっと花をいけてきた。

白い小花を穂の様に咲かせるサラシナショウマは初秋の山や高原に行かないと中々出会えない。

そんな貴重で珍しい花を秋の七草と取り合わせた。

白銀彩の花瓶を選んで、いつものように掃除をして水を打ち、静かにいけて飾らせていただいた。

源氏邸に生ける

健一郎

源氏邸を背景に秋の始まりを予感させる砂物を立てた。

夏にお庭を拝見した時には一面に白砂と苔が広がり、紫式部に因んで、紫色の桔梗が咲いていた。意識したわけではないが、竜胆、鳥兜、桔梗が入っている。撮影させてもらったこの場所で、今年の夏は桔梗を眺め、気が休まった事を覚えている。今庭は秋色に色づき初めている。

お庭を背景に撮ると作品に広がりがもたらされ、想像が膨らむ。大変、貴重な経験をさせてもらった。砂と水の関係、庭と立花には何か大きな共通項があるのかもしれない。近いものを感じた。砂ってなんだろう。

感謝の心で　仙溪

昭和4年、12世家元の13回忌を廬山寺で行い、13世と門人による「桑原富春軒塔」を境内に建立、以後当流の師範誓約式はこの記念塔の前でする事となり今日に至っている。

縁の廬山寺で「テキスト700号記念誌」の撮影を希望し、町田泰宣管長のご快諾を得た。

本堂の弥陀三尊は、臨終の際に浄土から迎えに来られた阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩の三尊仏で、今回特別に間近で優しいお顔立ちを拝めて感激である。

御前に立花を供えると「益々精進せよ」と励ましていただけた気がする。

この銅器は13世が職人に作らせたもので、笛を吹き舞を踊る天女が表裏に彫られている。インド原産の鶏頭と草花を主にした供花で三尊仏に喜んでもらえたら幸いである。

草花立花　＜4頁の花＞　仙溪

花型　直真立花
花材　鶏頭（莧科）
　　通草（通草科）
　　葦（稲科）
　　男郎花（女郎花科）
　　鳴子百合（百合科）
　　菊2種（菊科）
　　蓼（蓼科）
　　桔梗白花（桔梗科）
　　金水引（薔薇科）
花器　天女紋 金赤漆銅花瓶

秋草の投入　＜2頁の花＞　櫻子

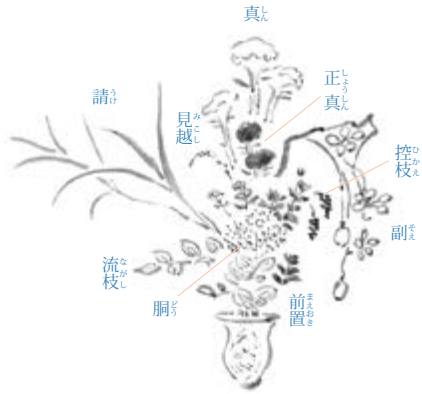
花材　薄（稲科）
　　矢筈薄（稲科）
　　更科升麻（金鳳花科）
　　女郎花（女郎花科）
　　柳葉田村草（菊科）
　　桔梗白花（桔梗科）
　　野鶏頭（莧科）
花器　銀彩 陶花器（寺池静人作）

砂物　＜表紙の花＞　健一郎

花型　砂物
花材　栂（松科）
　　朝鮮槙（犬榧科）
　　青肌の実（黐の木科）

山鳥兜（金鳳花科）
竜胆（竜胆科）
桔梗（桔梗科）
杜鵑草（百合科）
瓔珞躑躅（躑躅科）
花器　銅砂鉢

草花立花　＜4頁の花＞



砂物　＜表紙の花＞

薮山査子

＜6頁の花＞　仙溪

花材　薮山査子（酸塊科）
　　糸菊（菊科）
花器　陶花器

10月11月頃、ヤブサンザシの実が赤く色づく。秋のいけばなに自然な味わいを与えてくれる大切な花材だ。秋色に染まった小ぶりの葉と色づきかけた実。ごつごつとした枝。細枝の先には次の年の芽ができている。束を解くと意外なほど枝の広がりがあったりして、毎回どんな枝姿なのかワクワクしながらいけている。

相手には菊がいい。花屋には様々な色や形の菊が仕入の度に入れ変わり並んでいる。今回は藤色の糸菊を選んでさっぱりと2種でいけた。

ブルーベリー

＜7頁の花＞　仙溪

花型　生花　草型　副流し
花材　ブルーベリー（躑躅科）
花器　獣耳陶花器

葉が紅葉したブルーベリーの枝。暴れた味のある枝だったので生花にいけてみた。型に納めるのに苦労したが、ブルーベリーの野性味を感じることができた。

アメリカ北東部にイギリス人が住み始めた頃、その厳しい気候のため持ち込んだ農作物は育たず飢えで苦しんだそうだ。それを救ったのはトウモロコシの育て方や野生植物の採取や保存法などの先住民インディアンに教わった知恵で、中でも重要だつたのが広範囲に自生していたブルーベリーだった。実はもちろんのこと葉や根を煎じたお茶も愛飲された。

ブルーベリーの実が夏の間に熟すのは知っていたが、その後こんなふうに葉が色づくとは知らなかった。いけばなは植物を知る入口の一つである。

国民文化祭わかやま2021
きのくに花回廊
いけばなでつなぐ文化の和

会期　11月13日(土)～14日(日)
会場　和歌山城ホール
出品　桑原仙溪
日本いけばな芸術協会理事として賛助出品します。

大津市いけばな芸術展

会期　11月6日(土)～7日(日)
会場　大津市生涯学習センター

金赤漆銅花瓶　＜4頁の器＞

13世の時代、「テキスト」の前には「龍膽（昭和11～）」「挿花春秋（昭和24～）」が発行されていた。

挿花春秋13号に家元が天女を彫刻した銅器をデザインしたことが書かれている。伝統を現代に生かすことを考え、試作を重ねてできた2つと無い貴重な器である。

↑銅器に彫られた天女の図。

←挿花春秋18号に同じ天女図が。

秋満腹

＜8頁の花＞ 健一郎

花材　メラレウカ（蒲桃科）
　　菊4種（菊科）

花器　陶花器

毎年この時期になると菊が盛りを迎える。通年で菊を見かけるがこの時期まで生けるのをできるだけ我慢している。お腹をすかした後のご飯は本当に美味しい。ご飯前にはどれだけお腹が空いていようともおやつは食べない。一口食べると体が吸収していく様子がわかるよう。同じく、一年我慢して生けた菊は体に深く染み入る。一緒に取り合わせたのはメラレウカ。ティーツリーとも呼ばれ、お茶としても飲むことがある。擦ると柑橘系のいい匂いがする。アボリジニが葉の殺菌力を利用して万能薬として使っていたそうである。匂いから想像できるような綺麗な色が菊とよく合う。

色づいた木苺

＜9頁の花＞　仙溪

花材　木苺の紅葉（薔薇科）
槍鶏頭（莧科）
スプレー菊（菊科）

花器　陶花器

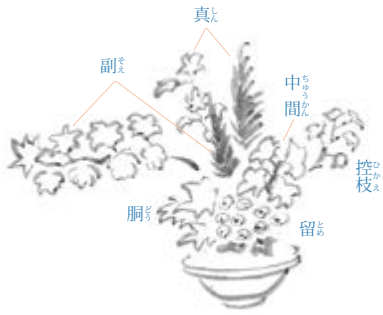
昨年10月末の宅配稽古の見本花。東京と名古屋の教室はコロナウィルスの影響で京都からそれぞれのお宅へ花を届けての自宅稽古が続いている。キイチゴの艶のある葉の色づきに季節を楽しんでいただけた。

数年前から出回るようになったキイチゴの紅葉は、少し高くつくが季節の味わいを感じられるし、花材の状態にもよるが良く保ってくれる。

季節を感じる花材はまさにご馳走だと思う。大切に育てられ、大事に届けられた花たち。器を考え、取り合わせを工夫し、丁寧に大切にいけてあげてほしい。花たちの良い表情を引き出せればそれで充分なのだ。

大切なのは良い花材との出合いをご馳走と感じることだと思う。自分がそう思わないのに見る人に伝わるはずがない。

ご馳走に感謝である。



レモンちゃんと白い彼岸花。今年は9本も咲きました。

立花時勢粧３３３年

仙溪

江戸時代前期の１６８８年（貞享５年・元禄元年）に桑原富春軒仙溪の『立華時勢粧』が木版刷りで出版されて今年で丁度３３３年になる。

１１８の絵図からなる『立花時勢粧３巻』と、花材の解説から始まる立花の手引き書『立花秘傳抄５巻』の合わせて８冊からなる花伝書である。

以前この「テキスト」でその膨大な内容を５年半にわたり紹介したが、一つとして同じものの無い絵図には植物の個性と息吹が見て取れ、また様々な故事や書物を引きながらの手引き書は、流祖の豊富な知識を感じると共に、揺るぎない花道理念が伝わってくる。

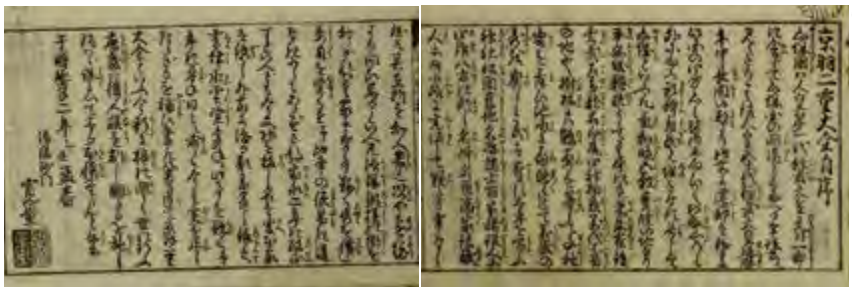
植物を見つめその生命を尊重し、自然の妙を花と共につくることが、桑原専慶流いけばなの根本理念だと気づかされる。

さて、延享２年（１７４５年）の京都案内『京羽二重大全』に「立花師　富春軒桑原仙溪流　桑原権左衛門」とあるので紹介しておきたい。

１６８５年の初版以降何度も改正版が出ていて、時代順に見ると流派が増えていく様子がわかる。

「立花時勢粧」３３３年と「テキスト」７００号の節目に、流派の歴史を振り返ってみた。

①

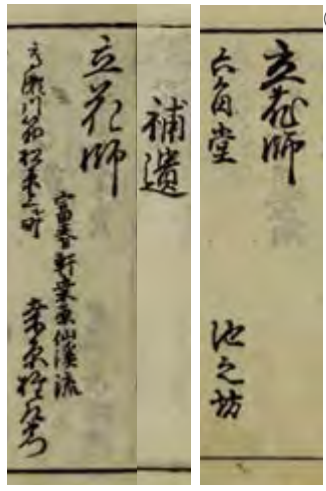


『改正増補・京羽二重大全８巻』延享２年（1745）の巻１序文。

『京羽二重』は京都の実用的な地誌・観光案内で「諸師諸芸」の項目に茶湯者などと共に立花師も紹介されている。
初版（貞享２年（1685））では立花師は「池之坊」と「大住院」だったのが、60年後の改正版（①②）では「池之坊」に「富春軒桑原仙溪流」が加えられている。

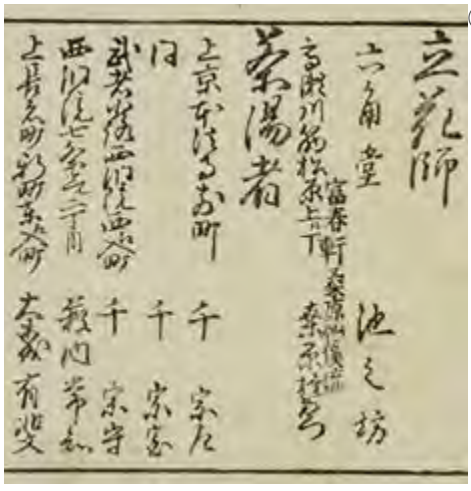
出展①②③④：京都府立総合資料館所蔵（ARC 古典籍ポータルデータベース）
https://www.dh-jac.net/db1/books/results.php?f3= 京羽二重

②



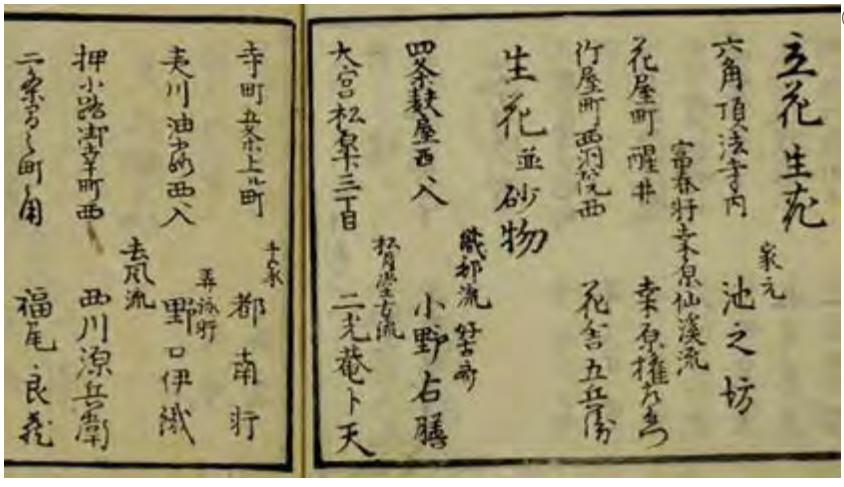
『改正増補・京羽二重大全 巻の三』
延享２年（1745）の部分。
出版間際に富春軒桑原仙溪流が加えられている。５世家元の頃か。

③



『明和新増・京羽二重大全 巻の三』
明和５年（1768）の部分。
延享版に続き「立花師」として池之坊と当流が紹介され、続いて「茶湯者」５人の名があり当時の様子が偲ばれる。

④



『文化増補・京羽二重大全 巻の三』文化７年（1810）の部分
「立花 生花」「生花 並 砂物」に９人を紹介。

『勘違いと見立て』

健一郎

勘が違っている事、物事を間違って思い込むことである。山の中で捨てられているゴミが花に見えたりする。見間違いだ。山の中に花を探しに行っているのだから色が目についてしまう。そのたびに残念な気持ちになる。花は誰かに気づいてもらいたくて色をつける。それは虫かもしれないし、鳥かもしれない。あるいは人間であるとも思う。そしてお菓子の袋もまた人に選ばれたくて色をつけている。山を歩きながら、勝手に期待して勝手に間違え、残念な気持ちになった。ただそこにゴミが落ちているだけなのに。

レビー小体型認知症は幻視を伴うことがある。レビー小体に限らず、認知機能が低下すると少しずつ勘違いをすることが増えてくる。よくよく話を聞いてみると、幻聴、幻視にはきっかけがあることに気がついた。火のないところに煙はたたないらしい。幻視、幻聴は見間違い、聞き間違いなのかもしれないと考えている。マスクに赤い絵の具がついていたら「鼻血出てるで！」と心配したり、「屋根の上を人が歩いてる！危ない！」と訴えがあるので見てみると鳥が歩いていたり、時には屋根を修理する人が歩いていたなんてこともあった。「あそこで男の人がずっと見てきはる」と不安そうな顔で相談された場所をみると確かに少し影ができていて不気味な雰囲気があるようにも見える。幻視に分類されるのは最後の例だけだと思うが、いずれも認知機能の低下による勘違いである。そして物事を感じとるセンサーの感度が増加しているように思う。不安がそうさせているのかは分からないが、何かを感じ取る感度は確実に高い。そして言葉から解放されているようにも思える。

道端での他者の話に耳を立ててみると、それぞれが話したいことを話していて、お互いに違う話なのだがお互いが満足そうにしている光景をよくみる。グループホームでも見かける。お互いに笑いながら話したいことを話せるだけでいいのかもしれない。

人の話を聞く時には、大抵、見当をつけて話を聞いているので、本当に話を聞いているのか怪しい。僕が勘違いをする時は話を適当にしか聞いていない時が多い。話を聞くと言うことは思いの外、難しい。それは聴こえる話に見当をつけてしまうからだ。見当をつけて聞くともはやそれは自分の話である。人の話は聞きたいようにしか聞けない。自分の知識と経験からの予測だ。会話を抽象化しある程度の数のパターンに分類してしまう。全く同じ経験をしたわけでもないのにすぐに分かった気になってしまう。その人からされる話はその人特有の物であるのにもかかわらずだ。

弟から「満月やで」と写真が携帯に届いた。通りの街灯の明かりに続いて満月が配置されており、どれが月だかよく見ないと区別がつかなかった。写真で見ると月も街灯の明かりも見分けがつかない。目を騙すのは容易いらしい。見間違いを誘発させる意図が見えた面白い写真だった。エッシャーの騙し絵やトリックアートに分類される絵が好例だろう。

意識的に勘違いをする変わった見立てという文化。日本庭園は石だけで水を表現したり、擬音語やごっこ遊びも見立てがあってこそである。花で言えば、花の色と葉の形から付けられた雪柳が真っ先に思い浮かぶ。他にも女郎花、擬宝珠など数多くある。見立ては想像力を大きく刺激する。

意識せず間違って思い込むと「勘違い」意識して間違って思い込むと「見立て」になる。

小学校6年生の頃、自分たちが一番偉いと思っていた。中学三年生の頃も威張っていた。高校三年になると他の中学生や小学生を見て自分にもあんな頃があったんだと驚く。大きな勘違いがわかると一皮剥けた気がする。今も同じことを繰り返している。偉いと思っていた時は根拠はなかったが自信があった。

今25歳になって自分の大きさが分かった気がする。そしてこれも勘違いなことも分かっている。まだ実感はしていないが。見える世界が少しづつ変わった。小学生の頃よりはいくらか、マシだろう。成長を求めてというよりは、好奇心が先行して、今もしたいことばかりしている。自分の前提や常識が大きく覆されたときの驚きと成長は大きい。何回もやり直すのだ。そして、おかしな影響を受けるような環境にはいたくない。早急に立ち去るよう心がけている。食べたものが体を作っているのと同じで環境が自分を作っていると考えているからだ。

歳を取れば取るほど、その前提や常識は揺るぎないものになってしまい、疑うことが難しくなるらしい。今までの自分の知見を疑うことが自己の否定だと勘違いするからだろうか。自分の常識が固まって安心できている時が一番危ないだろう。自分がこのまま歳を重ねる度にその都度疑いを持ち、勘違いを認める気概が必要なのだろうが、自分がどうなるかは分からない。

桑原専慶流いけばなテキスト700号　2021年10月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

秋明菊

〈12頁の花〉　健一郎

花材　丸葉の木（満作科）
　　秋明菊（金鳳花科）
　　藤袴（菊科）

花器　黒釉陶花器

去年の10月中旬に貴船神社に行った。秋海棠に出迎えられ、奥にまで案内される。

秋明菊の数は多くなかったが、八重で薄紫色のもの、白の一重が植っていた。背丈は僕の肩ぐらいまであり勢いがあった。

秋明菊は「貴船菊」とも呼ばれており、昔は多く自生していたらしい。現地で見るとその植物の見え方が変わる。

貴船神社の醸す雰囲気は秋明菊や秋海棠がよくにあった場所だった。

紅葉した丸葉の木が大きく優しく受け止めてくれている。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
11月号
No.701

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

立花時勢粧333年
記念挿花 ＜1～5、12頁＞

会期　9月18日(土)～20日(月)(祝)
会場　鹿王院
挿花　桑原仙溪　桑原櫻子
　　桑原健一郎

シンクロするアート

鹿王院の座敷、日本画家・藤井隆也氏の枯葉の襖絵に囲まれて、藤井氏の屏風の前に花をいける。へんに緊張せず不思議なほど心地よかった。襖絵の枯葉が優しく花を見守ってくれているような感覚。藤井氏がつくる独自の世界にいけばなが呼応する。花とシンクロするアート。

舞う　鹿王院本玄関

＜表紙の花＞　仙溪

花材　グロリオサ（百合科）
　　鶏頭（莧科）
花器　陶花器　竹内眞三郎作
屏風　藤井隆也作

グロリオサも鶏頭も天竺（インド）ゆかりの植物なので、古刹にいけると何か意味ありげだ。グロリオサの蕾の形が屏風の絵と響き合う。緑陰の小径の先で、赤い花と黒い華が舞い踊る。

キラキラ　鹿王院客殿

＜2頁の花＞　櫻子

花材　鍾馗水仙（彼岸花科）
竜胆（竜胆科）
男郎花（女郎花科）

花器　陶水盤　近藤豊作
屏風　藤井隆也作

無数の光の輪のようなこの屏風の色に合わせて、黄色と赤紫の花をいけ、絵と一体となるように白い花を加えた。水面にも敷板にも屏風の絵が映っている。花がキラキラ光って見えた。

命を視る　鹿王院客殿

＜3頁の花＞　健一郎

花材　通草（通草科）
二輪菊　嵯峨菊（菊科）
桔梗2色（桔梗科）

花器　掛分釉花器　清水保孝作
屏風　藤井隆也作

この屏風を目にした時何故か細胞を意識してしまった。細胞まで見ることはできないが、花の細部までに気を使って花を生けることができたらなと思わされた。

5種それぞれの輝きが調和するようにいけた。

米栂の立花

鹿王院韋駄天像前

＜4頁の花＞　仙溪

花型　除真立花
花材　米栂（松科）
　　霧島躑躅（躑躅科）
　　晒木

花器　遊鐶耳銅立花瓶

後ろに居られる韋駄天様は俊足で僧坊の守護をされている。遙か遠くの深山の樹を立て、供養させていただいた。

深山砂物

鹿王院茶室

＜5頁の花＞　仙溪

花型　砂の物
花材　錦木（錦木科）
　　天南星（里芋科）
　　甘野老（百合科）
　　笹竜胆（竜胆科）
　　藤袴（菊科）
　　白花杜鵑草（百合科）
　　下野（薔薇科）
　　紅羊歯（雄羊歯科）

花器　銅砂鉢

掛物　藤井隆也作

普段非公開の大河内傳次郎寄進の茶室。珍しい実や一足早い紅葉を床の間に。もてなしの花。

THE KYOTO

襖絵に走る葉脈
古刹・鹿王院
現代美術作家の創造

会員制の文化情報発信サイトに、藤井隆也氏の襖絵への思いが紹介されています。是非ご覧下さい。→

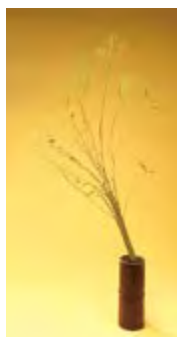
㊨ 緑陰の小径の奥で出迎える屏風絵といけばな
㊧ 昨秋奉納された木の葉の襖絵（56面）の1つ

行李柳

＜6頁の花＞　仙溪

花型　生花　草型　副流し
花材　行李柳（柳科）
花器　煤竹竹筒

行李柳の生花は櫛でといたようにというのが理想だが、途中で枝分かれしたものを混ぜながらその姿を生かすなら、多少の枝の交差には目をつむり枝が持っている勢いを表現したい。



晩秋の立花

＜7頁の花＞　仙溪

花型　除真立花
花材　柊（木犀科）

雪柳（薔薇科）
水仙（彼岸花科）
鳥不止（目木科）
椿（椿科）
赤芽柳（柳科）
寒菊（菊科）
小菊（菊科）

花器　陶花器

昨年の晩秋に稽古で立てた立花。テキスト1月号掲載の立花と同じ花材なので見比べてほしい。お手本として立てたもの（今回）と自由に模索しながら立てたもの（1月号）。どちらが優れているとかではなくて、立花を立てる時の姿勢としては、1月号のような自由な心でいたい。

文阿弥花伝書

仙溪

縁あって鹿王院で花をいけさせて頂けたので、鹿王院に伝わる『文阿弥花伝書』のことに触れておきたい。

この花伝書（3巻の巻物でおそらく後世に書き写されたもの）は供花の功徳や挿法・飾り方について仮名交じり文で書かれ、所々に彩色の絵図があり、各巻末尾に綉谷庵文阿弥の名がある。

序文に、仏前の供物の中で花を最も尊いものと位置づけ、花を嗜むことで現世で楽しみ来世で救われることができると説いている。

花伝書としては最初期の内容と思われるのだが、詳しい研究がされていないのが残念。ここに序文全文を紹介する。

『大和文華 第48号』掲載の釈文（読みやすく直した文）を参考にしたが、段落で区切り、仮名を漢字にするなどした。間違いがあればご指摘願いたい。

序曰

夫れ、この界は須弥の南贍部州、天笠太唐日本三国之に同じ、其の中に於いて我が朝万勝たり。

先ず神国なるがゆえに仏法に近し。諸宗の元祖三国に渡るに、諸経論秘伝尤もこの国に収まるなり。されば日域に生ずる人、知恵のかしこき事万鏡を磨き、心のゆるき事四海に満つ。

しかりといえども、その身の嗜み学する事は身躰に影の応ずるがごとく、心闇々たれば影うつる事なし。玉磨かざれば光なきがごとし。たまたま請けがたき人生を請け、生まれ難き国に生ずる事有り難き宿因と思い、一弾指の間もいたづらに日を送る事なかれ。ここをわきまえざる人はなげかしきや。三界六道に輪廻し悪道に堕せしめん基なるべし。今生後生のために諸芸を嗜むべし。

しこうして仏神三宝に六種の供物あり。その中にとりわき花供尤も勝りたり。又翫ぶ事私ならず、この道に深くわけ入り、深真不思議の信号を六ちんにそみ（六陳に染み？）、教えの如くに翫ぶならば、仏道修行にもここ無二無三の教行にあらずや。

先ず躰色この理をもってとるに、地水火風空の五躰なり。青黄赤白黒、色これに顕れ法報応の三身もこれあり。五音に五の響きまでも顕れたり。そのゆえは五躰六色具足しぬれば、すなわち三身万徳の悟りあり。これを識る事は易かるべきかな。又難かるべきかな。ただすべからく師の伝来をもって教えとす。

心に得たるところをもって悟りと定むべしや。心を千またにわかち、勢を天地に馳せてこの道を心えべき事肝要なり。たとえば万木千草ことごとくもって四季折々の風情をたもつ事、釈尊の深入禅定観見法界、草木国土悉皆成仏と法華経に説きます事も、釈尊一念の上なるべし。森羅万象有情非情の上をなべて草木国土と名をさしてのべ給うと見えたり。何事か疎かならむや。

松杉をしん（西教寺に伝わる文阿弥花伝書には「身」の字が使われている）に用うは真如実相の心と得べし。開落の花は随縁真如の道理と心得べし。又四季に変ぜざる草をば不変随縁とも真如平等とも観すべし。花を翫ぶ事は仏世にたとえば釈尊一代教法には華厳経の説と心得べし。もっとも荘厳第一の

文阿弥花伝書と伝わるものは滋賀の西教寺に7巻、九州国立博物館に残巻1巻、他にもあり、鹿王院のものには天承元年（1131）の日付がある。

『特別展 いけばな 歴史を彩る日本の美』図録より（2009）p42-43

鹿王院山門からの長い石畳。苔生した紅葉の林を真っ直ぐな道が続く。清浄な空気に癒やされる。

利益なり。花を挿げる室には諸天来迎あり、天人も影向したまうなり。

春は諸花の開落の枝をまじえ、匂ふんぷんとして袖にうつる事は、栴檀の林に入りてさながら栴檀を翫ぶにことならず。峨々たる枯れ木のこずえは鉾を立てたるがごとし。苔のひまよりみどり少々わひ出、若木をそねむに似たり。沙羅双樹のかり（殯？）に色を変ぜしがごとく。

夏はかきつばた花あやめなど水辺に咲ける趣で、すなわち涼しき事これを思うに江南の野水に戯れるがごとし。

秋は千種の花の朝露にかたぶき、己々の色をうつし、又夕時雨一通りのあとうち湿り、しどろに伏し違うを見るに、などか心を掛けざらん。

冬は山野悉くおしなべて霜雪に草木うづもれ、儚き思いにも堪えぬべきところに、傍らを見れば一もと菊の散り残り、虫の住みかの名残かと哀れなり。

又山橘、深山樒などいうものの実に色をなし、葉に水をふくみ青々明々とある事をみれば、また枯れ果てぬ世の有様と頼みあり。

めづらかに面白き事、いかなる慳貪放逸の人かこれをそねまんや。四季折々の無常を知って、有為の転変を悟らざらんや。生老病死の理をしるべきも、尤もこの一瓶のうちに漏れんや。

道俗男女在家出家貴賤上下ともにこの花を翫びなば、当来にては心を慰み客をもてなし、来世にては仏の会場に往詣して、種々の曼荼羅に座し、種々の花を翫ぶ事疑いあるべからず。

挿げる道より悟りを開かん事決定なるべし。委才覚のおもむき、この一巻のすえに顕了す。ただ古今の師伝にまかせ、かくの如くなるべし。穴賢他見あるべからず。これを秘すべし。

又曰く、花を立つ事、仏在世より今に至るまで戒定恵の三学をしめし給うその第一なり。香花火をもって三学を示し給うと見えたり。

（このあと巻1に72、巻2に67、巻3に9の事柄が書かれている。）

仏教と花の関係

文阿弥花伝書の序文を読んでいて、「仏教」と「花」の関わりについて新鮮な発見をした。

文阿弥は「万木千草ことごとくもって四季折々の風情をたもつ」この世界で、季節の移ろいを感じながら花を挿す行為そのものが「悟り」に繋がる崇高な「嗜み」だと力説している。

仏教の供花がいけばなの源流の1つと分かってはいたが、それは形式だけではなくて花を挿す精神も育んでいたのだ。

仏教僧が釈迦の教えに近付こうと花を挿すうち、花も人と同じなのだと気付きそれこそ釈迦の教えと悟る。花を慈しみその個性を生かすように挿した供花が自分も含めた人々の心を癒やす。そして何より花を挿すことでより良く生きるための道がひらける。日本に生まれてこんなに素晴らしいことをやらないなんてもったいない、と文阿弥は熱く語っている。

花を尊ぶ気持ちが良いいけばなを生むのだと最近つくづく思うようになったが、彼は同じことを書き伝えてくれている。

足利義満筆「鹿王院」の額と客殿。
襖絵の枯葉、屏風絵、花。それぞれが響き合い呼吸する。

鹿王院の舎利殿（現在修復中）。
中に源実朝が宋から招来した仏牙舎利（釈尊の歯）を安置する多宝塔がある。

『涸沢（からさわ）カールの印象』

健一郎

ナナカマドの赤色、ダケカンバの黄色、ハイマツの緑に覆われた3000メートル級の山々に囲まれた窪（くぼ）みへ菜月と2人で行ってきた。その場所は涸沢カールと呼ばれており、積雪が大きな氷になり重力によって流動して削られてできたくぼみだ。紅葉を見に出かけた。10月の上旬であった。

涸沢カールまで長野県の上高地から片道を徒歩で6時間ほどで着くらしいのだが、8時間ほどかかった。道は険しい。奥上高地とも呼ばれている。

出発してすぐの上高地付近では微かに残る夏に目がいく。標高が上がるにつれ、草木の様子が変わっていく。歩が進むたびに季節が少しずつ変わっていく。それは山を歩く楽しみでもある。

北アルプスの空気を心ゆくまで吸った。山芍薬を甘くしたような匂い、湿った土の匂い、動物の匂い、樹木が発するフィトンチッドの匂い。場所や標高が変わることでさまざまな香りを楽しんだ。中でも高い標高で森全部の匂いが内包されたかのような匂いはもう一度嗅ぎたいな、と下山した今も思う。山自身の匂いなのだろうか。良かった。

植物のない岩をゆっくりと歩いて山小屋により、ソフトクリーム。岩の道を歩きながら木陰に座り羊羹（ようかん）。そして涸沢カールの小屋でビールとおでん。格別だった。

小屋で一泊した。本格的な山登りは初めてだ。夜は寒く、いくら着込んでも寒い。外へ出ると雲で星は見えなかったが、テント泊している方達のテントが綺麗だった。することも無いので、早めに寝て起きると、日の出の時間だ。涸沢カールでの日の出は直接、日光に当たることは叶わない。涸沢カール名物、モルゲンロートを見ることができた。モルゲンロートとは、東から太陽の赤い光が山筋を照らし、山脈や雲が赤く染まる朝焼けのことを指し、山がもっとも美しく見える現象の一つとされている。太陽で照らされた山を背に下山をする。危なっかしくはあったが、ペースを上げ6時間で麓まで戻れた。急な道中も文句を言いながらついてきてくれた菜月には感謝している。1人でなく菜月と帰ってこれたことに大きな意味があるように思う。食べ物が血肉を作るように、見たもの感じたものが感性を作る。2人で色々なものを見て歩きたい。

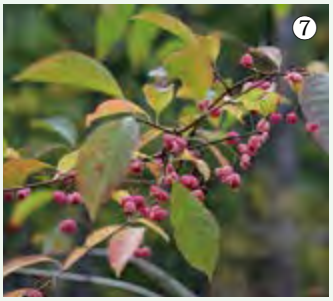
①

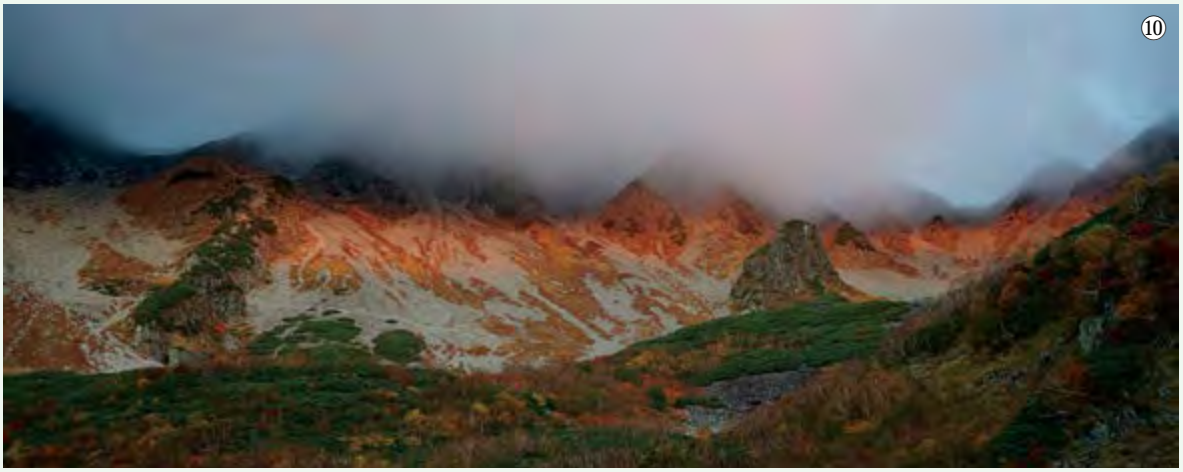
②

③

④

⑤





①涸沢カール付近のゴヨウマツ。這うように枝を伸ばしていた。　②徳沢付近で猿をよく見かけた。キノコをとって食べて日向（ひなた）の程よい倒木の上に腰掛け食べていた猿が印象深い。　③オヤマボクチ。　④ノギク。道中に時折花が残っている。　⑤フジバカマ。　⑥横倒しに伸びるナナカマド。　⑦マユミの実。　⑧上高地、河童橋と星空と。⑨新月の夜空に満天の星。　⑩日の出の瞬間、山が赤く染まる。モルゲンロートと呼ばれる神秘的な光景。

桑原専慶流いけばなテキスト701号　2021年11月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏 ほか

花一輪

鹿王院客殿

＜12頁の花＞　仙溪

花材　蓮（睡蓮科）
　　笹竜胆（竜胆科）
花器　黒釉鉢（竹内眞三郎作）

あまり禅問答のような花をいけようとは思わないが、一輪の花を大切にする気持ちは持っていたい。手にした花のどんな表情を見せたいのかによって、器を考え、取り合わせを工夫し、いける本数を決めるようにしている。

この屏風絵は表紙の屏風の裏側で、ここにはハスをと決めていた。枯れ行くハスの葉を一輪のリンドウが優しく見ている。

小菊とレモンちゃん
菊薫る季節～　10／12撮影

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
12月号
No.702

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

純白のクリスマス

＜2頁の花＞　櫻子

花材　メラレウカ
（フトモモ科）
シンフォリカルポス
（忍冬（すいかずら）科）
ダリア（菊科）

花器　ガラス花器

メラレウカとダリアの横に添えてある木はシンフォリカルポスという名のスイカズラ科の植物。英名はスノーベリー。秋の頃きれいな白い実をつける。何度聞いても覚えられない名前だが、調べてみるとギリシャ語で「房状になっている果実」という意味らしい。日本語では普通すぎる意味なのにギリシャ語ではすごくミステリアスな言葉になる。

純白の実がクリスマスらしい雰囲気を出してくれる。

最近では長い期間出荷されるようになったメラレウカ。足元をよく割っていけると日持ちしてくれて豊かでしなやかに花を引きたててくれる。

暖かそうなショールを巻いてあげたくなった。

メリークリスマス

＜3頁の花＞　仙溪

花材　ブルーアイス（檜科）
　　薔薇（薔薇科）
　　スプレー薔薇（薔薇科）

花器　陶花器

小雪を過ぎると風の冷たさに体がこわばる。でもクリスマスがやってくると思うとウキウキする。12月にいける花には温もりを感じたい。森の針葉樹に純白と深紅の花を添えると、清らかで温かな優しさが感じられる。

初冬の二瓶飾り

＜4頁の花＞　健一郎

花型　生花　二瓶飾り（にへいかざり）
花材　満天星（どうだんつつじ）（躑躅（つつじ）科）
　　水仙（ひがんばな）（彼岸花科）
花器　煤竹（すすだけ）竹筒
　　結晶釉水盤（前田保則作）

ドウダンは面で葉を見るように生けた。枝振りも格好が良いがお生花の形には線が増え、効果的に魅せることが難しい。まだ咲く前の水仙と飾った。二瓶で飾ると季節の幅が限定され、より今を味わう事ができる。

十四世の生花

＜5頁の花＞　仙齋

花型　生花　二種挿し（にしゅざ）

花材　桐（きり）（桐科）

　　満天星（どうだんつつじ）（躑躅（つつじ）科）

花器　陶花器

以前のテキストでは白黒写真だったのでカラーで再掲載。健一郎の生花と並べてみた。喜ぶ父が目に浮かぶ。　仙溪

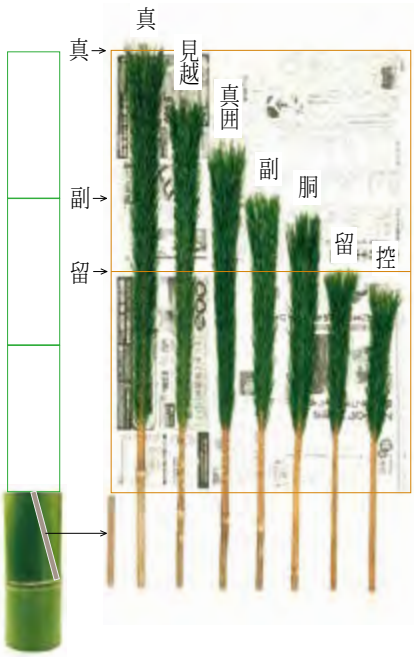
若松生花

仙溪

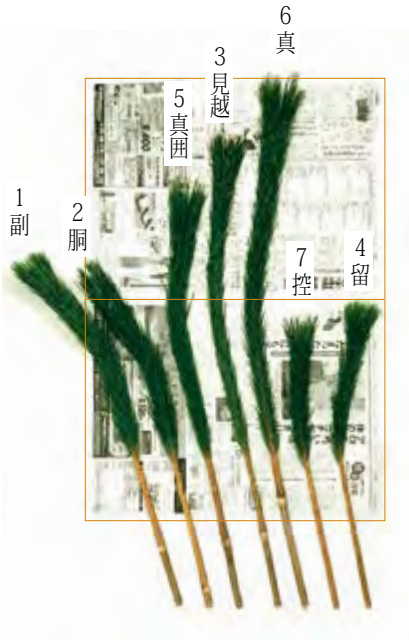
花型　生花　真型
花材　若松（松科）
花器　青竹竹筒

今年もそろそろ新しい年を迎えようとしている。12月の中頃からお正月花の稽古が続く。ソーシャルワーカーの人達はおそらく花をいけるどころではないだろう。コロナ禍にあっても稽古ができることに感謝しよう。

◎枝を選び、それぞれの長さに切り、足元の葉を取り除き、木肌を美しく磨く。



◎それぞれ撓めて形をつける。数字はいける順番。



◎又木配りのかけ方
◎役枝を入れる順番と位置

1 副（そえ）
2 胴（どう）
3 見越（みこし）
4 留（とめ）
5 真囲（しんがこい）
6 真（しん）
7 控（ひかえ）

◎横から見たところ
真の先は足元の真上に。

昨年、宅配稽古に添えるために若松生花のプリントをつくったので、ここに掲載しておく。

飾る場所によって右勝手、左勝手を決めてからいけること。

竹筒（9寸＝27センチ）の3倍と新聞紙の幅がほぼ同じなので、新聞紙を広げた幅が真の水際からの長さとなる。

副は真の3分の2。留は真の2分の1。

これらの長さに水際から下の長さを足して切る。

諸木の中に松の緑は四季に変わることがない。このことから祝意の生花としていけられてきた。慶事の花として、神への供え華として、清浄純粋な心でいける花である。

切り立ての清々しい青竹の筒に若松7本を「真の花型」にいけ、水際に紙を巻き、金銀の水引を「ともえ結び」にする。

真塗りの蛤板、または白木の板を敷いて飾り、紙が濡れないようにやや少なめに水をはる。

『言葉と自然』

健一郎

自分が思う花の楽しさを稽古で人に伝えるようになって3年くらい経った。

あるお弟子さんが生けた菊の花を拝見した。やや前傾に直立した菊の葉が殆どむしり取られている。「葉を取るのが楽しくてつい取りすぎてしまいました。」と笑っている。綺麗な目だった。花の味わい方はそれぞれで、彼女は自分に素直だった。私の花の味わい方が拡張されたようにも思う。葉を取ることに罪悪感を感じる気持ちはもちろん大切だが、それは倫理を通して感じられる感情であり、葉を取る行為のみを考えると不快なものではない。

私は主として、花の美しさと生命力を味わっているのかなと自分では思っている。個人的に近頃思うのは、情報で溢れる世界になってから、みんな頭で考えすぎているようにも見える。人が知っている範囲の事ならなんでも調べれば出てくる。情報を価値にすることは、自分の価値、本質を把握しておらず、自分が何をしているかわかっていないという事である。もったいなく感じる。情報自体に価値はない。家元が文阿弥花伝書をインターネットから閲覧しているのを見て感じた。なんていい時代なんだろう。知る環境はこれ以上なく整っている。情報をどう使うかである。

知る環境が今に比べて不便だったに違いない室町時代。その時代の人達が真摯に花に向き合い、悩み、一つの答えとして記したものが花伝書であり、禁忌であった。室町の花伝書には禁忌が多いという。言葉の響きが悪い花は特に嫌われた。紫苑(しおん)は祝儀の席では死に通じるところから禁花にされ、赤い花は引っ越しの際は火を想起するので禁花とされていたそうだ。花一つ一つに名前をつけ意味を考える。一つ一つの花と向き合っていたことがうかがえる。

「古代の呪術性のなごりともいえる禁忌の意識を取り去ったのが近世に生まれた生け花様式である。それは草木花が古代との血縁を失い、単なる花材になったということである。」

と川瀬敏朗は述べているが、ある部分では納得できるが、ある部分では再考の餘地があると考えている。観念的に花と向き合い、真摯であることは立派なことであると個人的に考えている。その一方で、実践的に身體を通じて真摯に向き合うことも大切であると感じるようになった。つまり私は真摯に花に向き合う姿勢が好きなのである。言語や意味を重視し、脳を使って考える観念的解釈と五感や身體を使って感じ、そのものの本質と向き合う実践的な解釈があると考えている。

室町の頃から花伝書などで決まり事を作ることは、言葉で論理的に解釈したもので、剝き出しの自然性や本質は言葉で伝えられるはずがない。なぜならば、言葉にした時、それは物事を定義し、観念的に解釈することになるからだ。花伝書で伝えたいことは決まり事そのものではない。決まり事として、本質を人に伝えるべく仕方なく言語化し、仕方なく論理で説明している。それは人に思いを伝える手段が言語だからである。言葉を使用せず思考することはできない。このジレンマにソクラテス以降の哲学者は苦しむことになる。

葉をむしり取る楽しさは、身体的なものであり、また、原初的でもあると考えている。生花を生ける際に枝を撓(た)めたりするのは確かに楽しい。オランウータンは水平で頑丈な、身体を預けられる木を見つけて若い枝を集めた後、曲げて巣を楽しそうに作る。そんなものなんだろう。人と枝との付き合いの長さは思っている以上に長いものかもしれない。二足歩行の始まりにもいろいろな説があり、その中の一つに二足歩行は木の上で始まったというものがある。外敵が比較的少ない木の上での生活を始めた、僕らの先祖にあたるかもしれない生き物たちが木と花の中で生活していたということはm今私たちが花を見てなんだか感じる安心感とつながっているのかもしれない。

「物真似には似せないという位がある。物真似を究めその物にまことなりきってしまえば、もう似せようと思う心などない。こうなればただ見せ場を嗜むのみで、花が咲かないということがあろうか。」

世阿弥の風姿花伝からの引用である。似せようと思う心は頭の中の解釈でしかない。そのさきに理屈でなく実践的に本質と向き合うことで花を咲かすことができるのであるのではないだろうか。似せないという境地は面白そうだ。

言語、論理と対極にある生命そのものの広がり自然のありのままの姿。言語、論理は人間の脳が世界を切り取り、論理を抽出して、都合よく構築した整った人工物であるから、自然そのものの本質はこぼれ落ちやすい。科学や学問はただひたすらに言葉と論理の力で世界を分類し、名付けをする行為ともいえる。

そのためには剝き出しの自然や本性に触れている必要があり、五感の意識のありようが大切である。言葉や情報でなく、目の前の花、人そのものを受け入れることが大切である。

五感の力を鍛えることはありのままの自然に反応できるための準備である。何か不思議なものを見た時に人は分かろうとするが、分かろうとしてはいけない。そのものを受け入れるのだ。言語や論理は「分かる」だが、自然の本質は、そのものを「受け入れる」のだ。文章にしていて今納得した。すごく気持ちがいい。

菊の立花

＜表紙の花＞　健一郎

花型　除真立花
花材　満天星（躑躅科）
　　水仙（彼岸花科）
　　小菊４種（菊科）
　　寒菊（菊科）
花器　獅子耳銅立花瓶

毎年、菊の季節を心より楽しみにしている。その中でもこの乱れ菊は特別である。剥き出しの自然の力を強く感じる。今の自分と波長があう。今年も直に触れることが出来て嬉しく思う。

去年は菊一色で立てたが、今回はドウダンと水仙を共にした。

それぞれがそれぞれの場で魅力を発揮できている。

横から見た奥行き

④

⑤

霧島躑躅の生花

仙溪

「紀の国わかやま文化祭2021」の「いけばな芸術展」にご招待いただき、関西の先生方と共に和歌山城ホールに花をいけてきた。（11月13日～14日）（写真④⑤）

ガラス越しにお城を見る素晴らしい空間で、イチョウの黄葉を背景に季節外れのツツジの花が映えていた。

偶然にもツツジは和歌山市の花だそうだ。ちなみに和歌山県の花はウメ。お土産に梅干しを頂戴した。美味しく頂きました。

花伝書を読む

立華時勢粧を読む ⑥③

立花時勢粧　下

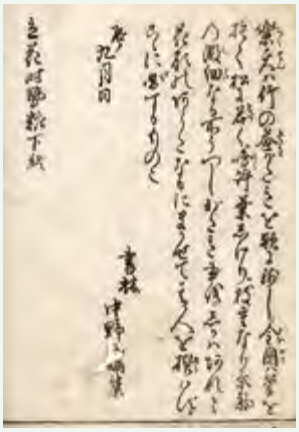
仙溪

識語

楽天は竹の描きがたきを歌に残し、金岡は筆を捨て松に名づく。嗚呼葉しげり枝重なり景気の微細なる所うつしがたき事か。しかはあれど花影のあらたなるにまかせては人を選ばず。ここに図するものなり。

辰の九月日

書林　中野氏編集



『立花時勢粧　下』より

一昨年までの5年間で「立華時勢粧」を紹介した時、この識語（本の由来や年月を記したもの）を抜かしていたので、ここに掲載する。

楽天とは中国唐代中期の詩人、白居易（772~846）の字。自然や暮らしの中の輝きを謳った詩は日本にも影響を与え、源氏物語にも多く引用されている。

金岡とは巨勢金岡のこと。平安時代前期の絵師で、熊野権現の化身と絵の腕比べをして負かされた「筆捨松」の伝承がある。

この識語もだが、「立花時勢粧」には「種樹郭橐駝傳」（テキスト６３２参照）など中国、日本の古典からの引用が多い。序文の次の箇所、

されば瓶上に南山の美をつくし、砂鉢に西湖の風色をうつす。ちからをもいれずして高き峰、深き溪を小床に縮む。至らずして千里の外の勝景をみること、その術諸芸の及ぶところにあらず。

（立花時勢粧序　テキスト６１２参照）

この印象的な部分にある「ちからをもいれずして」はもともと紀貫之による古今和歌集の序文に使われている。

やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事業、繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

（古今和歌集仮名序の前半部）

古今和歌集も立花時勢粧も、前回紹介した「文阿弥花伝書」の序文も、自然の輝きを伝える術として歌や立花の素晴らしさを語っている。

「季節の輝きを表現する」ことが原点なのだと教えてくれている。

「文阿弥花伝書」の謎

前回序文を紹介したが、「文阿弥花伝書（鹿王院蔵）」には謎めいた所がある。

文阿弥は室町時代の「たて花」の名手で足利将軍に仕えた同朋衆の一人。

1，巻末の年号と日付の謎

天承元年　五月十三日

天承元年は1131年、平安時代だ。5月13日という日は巻3の最後にも「五節花の事」として「五月十三日 竹」とある。これは中国の俗説「竹酔日」のことを指していると思われる。この日は竹が酔っているので植え替えに最適な日とされた。

天承元年を調べてみると、宇治に蟄居していた藤原忠実が鳥羽上皇に呼び戻された年にあたる。

常識的には花伝書の内容が平安時代のものとは考えにくいが、なぜこの年号と日付を敢えて使ったのか。植え替えた竹が根付き育つ如く、挿花の極意を伝授する意味で花伝書相伝の日付としたとも考えられる。

「五月十三日 竹」以外にも「菊ばかり

立てず」と書かれていることなど、他の花伝書には無い内容があり興味深い。

2，「花の書」「紀貫之」「宇治の宝蔵」「玉津島明神」

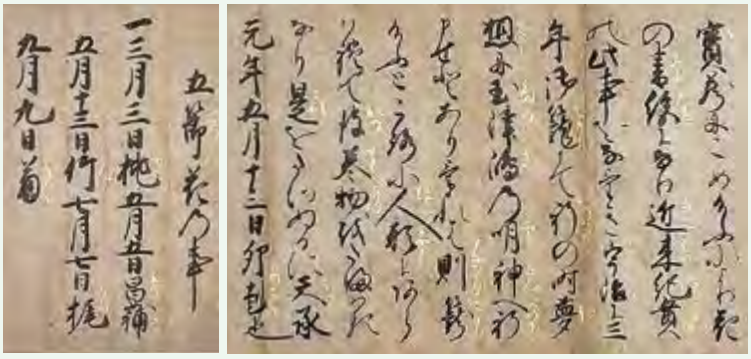
わが朝において、花の書宇治の宝蔵に込めたまうより花の書絶になり、近来紀貫能この事をなげき、宇治に三年お籠候て祈の時、夢想に玉津嶋の明神へ祈申せとありければ、則ち籠給うところに人形にあらわれて彼巻物を賜るなり。これをたづぬるに、天承元年五月十三日卯の刻なり。

巻3に右の文章があり「花の書」なるもののことが書かれている。

紀貫之（872~945）と玉津島明神の関係は能の「蟻通」の中でも語られる。紀の国・和歌浦の玉津島明神は和歌の神様であり、貫之も参詣したであろうことが「貫之集」からうかがえる。その帰途に和泉国の蟻通明神で詠んだ歌を題材に能の「蟻通」がつくられた。

紀貫之の書いた「土佐日記」は和語和文和字による日記文学の魁けである。また彼は古今和歌集の編纂のあと、宮中の書物を管理する御書所預に任ぜられている。日本的なるものを生み出した紀貫之に、宇治の宝蔵で「花の書」を見つけさせたのには、何か意味がありそうだ。

「花の書」とはいかなるものを指すのか。古い時代の供花について、その挿法を記したものだろうか。



『文阿弥花伝書・鹿王院蔵』巻３の部分。㊨花の書について、㊧五節の花に五月十三日竹とある。　『特別展 いけばな 歴史を彩る日本の美』（2009）より

玉津島神社の北西にある雑賀岬展望台に登った。古の「若の浦」もこんな景色だったのでは。

玉津島神社

私も明神様から花道の極意を授かろうと玉津島神社を訪れた。（11月13日）

上古より天照大神の妹神である稚日女尊をご祭神とする。またの御名は丹生都比売神である。

紀ノ川の河口に位置し、潮の干満差が大きく、満潮時には干潟に点在する山が海面に玉のように浮かぶ島となったそうだ。周辺は美しく稚い浜辺「若の浦」と呼ばれたが、聖武天皇によって明光浦と命名、又いつしか「和歌の浦」とも呼ばれるようになる。歌に多く詠まれており、衣通姫尊も祀られるようになってからは和歌三神の一社として崇められてきた。

和歌山市には未知の古墳が多く眠っていると聞く。「花の書」ゆかりの玉津嶋明神について、ますます興味が湧いてきた。

玉津島神社の紋。玉（宝珠）と菊だろうか。白波を白菊と見る和歌がこの地で詠まれている。

桑原専慶流いけばなテキスト702号　2021年12月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

季節の輝き

＜12頁の花＞　仙溪

花材　衝羽根（白檀科）
　　烏瓜（瓜科）
　　岡虎の尾（桜草科）

花器　陶花器

カラスウリの愛らしい実はまさに季節の輝きだ。見ると思わず微笑んでしまう。葉はすぐに萎れるので撮影直前まで水に浸けておいた。オカトラノオの紅葉とツクバネを合わせると、とびきりのご馳走になった。

レモンちゃん。太陽のあたる温かい場所をよく知っている。